Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

浴像浴書画詩

巻三

728.2
Y363t
4

澄懐堂書畫目錄卷三

二峯　山本悌二郎纂

吳偉江山秋漁圖大幅

高七尺四寸七分　闊三尺四寸　紙本

淡著色畫。浙派の手法を以て江山漁舟を寫し、墨彩濃淡、變化窮り無く、行筆飛躍、草書の如し。其の縱横揮灑、毫も弛緩の痕無きは、小僊が北畫の泰斗たる所以なり。「小僊」と款署し、江夏吳偉の方印を鈐せり。

北宗山水に嫌ふ所は獷悍なるに在り。而も筆致削利、魄力彌漫は其の所長なり。吾が邦傳來の支那畫には古來北宗尤も多く。戴文進、張平山、吳小僊等の名は市井の賈人もこれを知らざるなし。唯流傳の品は多くは四五尺の短幀にして麤獷の迹顯著なるものゝみ。而して巨幛大軸に縱横の筆を揮ひたるは一も之を見ず。南宗信者をして愈〻詆訾を試みるに便ならし

80484

む。此の江山秋漁圖の磅礴たる氣魄は蓋し北畫の爲に雪寃の資たらずんばあらず。

祝允明臨黃庭經卷

高八寸五分　長二尺九寸五分　藏經紙

烏絲欄。凡て五十四行。「成化丙午六月十七日、枝山祝允明臨」と款識し、後に復識して曰はく「允明少好學書、於書無所不學、至此不覺羞澁盡露、米老所謂神氣雖清、體骨疲甚矣、正德庚午九月望日、允明重題」と。枝山、祝希哲の二印を鈐せり。卷首下に枝指生の長方印あり。成化丙午は枝山二十七歲にして、正德庚午は枝山五十一歲なり。子京、淨因庵主の二藏印あり。拖尾に董其昌、文嘉、王世貞の跋あり。董其昌は云はく、「晞哲の楷書は木難火齊の如し、多く得へからす、而して一月の內に再ひ見たり、俱に精絕にして此の卷姿韻尤も勝る、之を大快と爲す」と。文嘉は云はく「鵞經の筆法は本より瘦せたり、而して公の此の卷は獨り肥えたり。其の結構と天趣とに至りては、卽ち右軍再起すとも之に過くること能はじ」と。王世貞は云はく「京兆の此の書は圓潤秀眉、眞に大令の後堂に入るへし。而るに休承は其の肉を以て勝れたりと謂へり。蓋し未た嘗て宋搨內景經の書法、純ら肉を用ゐて自ら筋骨乏しからさるを見さりしならむ。京兆一蹴して此に至る、良に其の平生積累の功多きに居るのみ」と。董、文、王、三家の書亦皆甚た佳なり。就中王世貞の墨蹟は稀覯の珍蹟なり。卷中瑯琊王敬美氏家藏圖書、淸森閣書畫記、皇六子和碩恭親王、御賜、爲國藩輔の諸印あり、卽ち此の卷は王世貞、王世懋兄弟の家藏に係り、後淸朝に至りて恭親王に歸せしを知るべし。

枝山は黃庭經を臨せしこと一再ならず。王穉登嘗て枝山の黃庭臨本に跋して曰はく、「古今黃庭經を臨するもの數十家を下らす。然れとも皆點畫形似、鈎環戈磔の閒に泥めるのみ、昔賢に脫塹の譏ある所以なり。枝指公は獨り能く渠蘧繩度の中に於いて、豪縱奔逸の意氣を具ふ、豐肌の妃子、霓裳羽衣を著て、翠盤の中に在りて舞ふ、驚鴻遊龍の徊翔自若なるかことし、信にこれ書家の絕枝なり」と。恰も此の卷の爲に云へるか如し、また王文治は其の快雨樓題跋に云はく「祝枝山、少時書を學へり、其の父、其をして近時の人の書を見しめざりきと、故に筆端、魏晉人の意あり、楷法尤も古媚なり、若し後に董香光無くは、卽ち枝山は固に有明第一の書家なり」と。又云はく「京兆の佳書は小楷に多し、其の文待詔に超出せること啻に倍蓰のみならす」と。

此の卷は枝山か壯年臨摹せし所にして、書法高古整謹なり。加ふるに紙素精好、墨彩漆の如き

を以てす、眞に祝蹟の最上乘なるものに屬す。

祝允明書離騷經卷

高七寸七分　長七尺四寸五分　紙本

題字本文款署を合せて百三十一行、楷行書に閒ふるに草書を以てす。款識に云はく「弘治庚戌秋八月晦日、枝指道人祝允明書」と。下に吳下阿明の一印を鈐し、前に縕眞閣の一印あり。枝山三十一歲の書なり。卷首下に西堂老人、尤侗之印の二印あり、卽ち尤西堂の舊藏たりしを知る。外に藏印二あり。拖尾に淸の張照の一跋あり、勁挺賞すへし。枝山晩年の書は奔逸縱橫にして往往放肆に流れたるもあれとも、而も中年は精謹絕倫、晩年に比ふるに全く別手の觀あり。此の卷は卽ち中年刻意の筆に係り、姿態嚴整にして、一筆の懈怠無し、合作と稱すへし。文衡山は嘗て云はく「今人多く枝翁の草聖を收む、乃ち復其の早歲楷法に工なりしを知らす。昔人張長史の書を評して驚蛇、草に入り、飛鳥、林を出つといへり。而も郎官壁記は乃ち嚴整を極めたり。世固に草書を能くして正書を能くせさる者は有らず」と。王虛舟は云はく「他人の書は千紙一同なれとも、惟祝京兆は紙各〻態を異にし、字各〻勢を異にし。平生同きもの有ること無し。僕京兆の書を推して有明第一と爲すは是か爲なり」と。吾齋收むる所の枝山の書は二三に止まらず、其の書體を對勘するに、異中同あり、同中異あり。之を要するに各〻其の妙趣を極む。虛舟の言果して吾を欺かさるなり。

祝允明書待漏院記卷

高九寸　長十五尺六寸五分　紙本

草書。宋の王禹偁の待漏院記、凡て八十八行。「正德丙子歲秋日、枝指道人祝允明、書于廣州官舍之望海亭中」と款識し、祝印允明、祝氏希哲の二印を鈐せり。卷首に長州の二字印あり、正德丙子は枝山五十七歲にして其の歿前十年に當る、卽ち廣東興寧知縣たりし時なり。此の卷は曾て蒲作英の愛玩に係り、作英の題籤及ひ跋文あり、跋の一節に云はく「鮮于伯幾此の豪橫無し、靑籐老人此の神化無し」と。推重至れりと云ふへし。孫月峯は其の書畫跋跋に枝山の草書を論して云はく「京兆は顚史に近からす、狂僧に稍〻近し。然れとも姿を取る處多く、要するに的派にあらさるなり。顚米には態彷彿として之に似たれとも、用筆は亦類せす、若し素骨にして芾姿なりと謂はゝ定評たるに庶からん」と。今此の卷を諦觀するに孫の評は頗る

味あるを覺ゆ。

祝允明和陶飲酒詩册

高九寸闊約五寸　計三十二頁　紙本

寸大の行書。陶淵明の飲酒詩を和韻したるを二十首錄せり。凡て百二十六行。首幅に「和陶飲酒二十首」と識し並に序して云はく「僕本拙訥、謬干時名、兩年之間、三謁京國、遊趣既勸、風埃黯然、舟中有二蘇和陶詩、夜燈獨酌、讀其飲酒二十篇、不勝悵慨、聊復倚和」と。詩は五言律なり、末幅に「乙酉秋七月望後、書於新居樓中、枝山允明」と款識し祝印允明の一印を鈐せり。乙酉は嘉靖四年にして、枝山六十六歲、卽ち歿前一年なり。枝山晚年の書は頹縱のもの多かりしかども、此の册は却つて整精なるは喜ふへし。首幅と末幅に皇六子和碩恭親王、皇六子、恭親王、孝慈堂圖書、潘氏珍賞章、外六印あり。又「潘氏海山仙館藏」の題籤ありて皇六子和碩恭親王の印を鈐せり。海山仙館は廣東著名の鑑藏家潘正煒、字季彤の堂號なり。石渠寶笈(卷十)にも亦祝枝山の「和陶飲酒詩册」を載錄せり。其の第十六第十七の二首は草書、餘は皆楷書なり、末幅の款識に云はく「向得舊紙、久藏笥中、興至則隨意作數行、乃平生之戲耳、觀者勿謂老翁更多兒態也、乙酉秋日、允明記」と。卽ち此の册と同年の作なり、此は行書にして彼は楷書なれども、同一の詩を同年に重錄せしは、以て其の會心の作たるを知るへし。

祝允明前後赤壁賦長卷

本紙　高一尺四分　長三十三尺二寸　藏經紙本

跋紙　高一尺四分　長四尺五寸五分

金粟山藏經紙。狂草にて前赤壁、後赤壁の兩賦を書せり。款識に云はく

客愛余書、又愛蘇賦、蘇固余愛而辭賦亦有說也、且以狥客蛤蜊爽氣明日語客、枝山書

祝印允明の一印を鈐せり。

黃省曾、文徵明、文嘉、文從簡、文震亨の跋あり。黃跋に依れは此の卷は汪西山の爲に書せしところなり。文跋は二次に亘り、初め小楷を以て一跋を書し、字誤脫ありて更に行草書を以て同一文を再錄せり云はく

昔人評張長史書、囘眸而壁無全粉、揮筆而氣有餘興、蓋極其狂恠怒張之態也、然郎官壁記、則楷正方嚴、略無縱誕、今世觀希哲書、往往賞其草聖之妙、而余尤愛其行楷精絕、蓋楷法既

工、則藁草自然合作、若不工楷法、而徒以草聖名也、所謂無本之學也、余往與希哲論書頗合、毎相推讓、而余實不及其萬一也、自希哲亡、吳人乃以余爲能書、過矣、昔趙文敏題鮮于太常臨鵞群帖、所謂無佛處稱尊者、盖謙言也、若余則何敢望吾希哲哉、因閲汪君所藏赤壁賦、漫書如此、嘉靖甲午閏二月既望、文徵明書。

枝山の此の卷は、其の草書の尤も奔放宕落なるものに屬す。數十尺の長卷に一氣揮灑して、墨痕淋漓たり。筆勢の趨く所、縱横變化、端倪すへからす。初めは矜練にして、中ころは磊落に、末段に至りては起伏轉折、變幻自在。所謂る怒猊石を抉り、渴驥泉に奔るの勢あり。蓋し醉後の書ならん。若し夫れ八法の準繩を以て之を論すれは、得失相半せるを免れされとも放肆の中に自ら法度あり。後の狂草を作る者の牛鬼蛇神の醜に陷りて自ら覺らさるの比にあらす。王弇州曰はく「希哲は王謝門中の佳子弟の如し、偃蹇縱逸なりと雖も而も人をして憎ましめす、跳蕩健鬪なること祭將軍の如くにして而も雅歌投壺の風味あり」と。洵に弇州の說の如く枝山の狂草は不羈奔逸を極むれとも一種の風味人の心目に快きものあり。蓋し蹊徑の甚た高きか爲なり、莫雲卿亦曾て枝山の草書を評して曰はく「祝京兆の書は豪縱ならすんは神奇を出たさず。素師は清狂を以て翰を走らせ、長史は酒顚を用て墨を濡ほせり。皆これ物な

り。今人第古法の榘矱中より來れるを知りて、而して前賢の胸次故と自ら雲夢を呑み、若耶を湧かし、變幻煙霧の如く、奇怪、鬼神の如きものありしを知らず。後士が僅僅尺楮寸毫の間に盤旋するか若きにあらさるなり」と。亦知言と云ふべし。但草書を以て其の行楷の整謹なるものに較ぶれば、殆と別手に出つるが如し、是れ枝山が餘子に超逸せる所以なるを知らざるべからず。古人が董源の畫を論して「北苑は龍の如し」と云ひしは、其の變化の多きを指せるなり、枝山の書は猶北苑の畫に於けるか如きのみ。

文徵明溪山避暑圖立軸

石渠舊藏

高四尺八寸一分　闊一尺五寸二分　紙本

黃鶴山樵の筆意を以て、溪山屋舍人物を寫し、疎に失せす密に過きず、正に疎文細文の閒に在り。山樵を倣ふと云ふと雖とも、徵明獨特の描法は滿幅に流露せり。文畫を見るに慣れたる者は、款署を見るに及はずして、直に徵明たるを知るに難からす。設色亦瀟濂澹泊にして筆意に適ふ、徵明得意の合作なり。「嘉靖辛丑秋日倣黃鶴山樵筆意、長洲文徵明」と款識し、下に文徵明、衡山の二印を鈐せり。辛丑は嘉靖二十年にして我か天文十年卽ち德川家康の生るゝ

前に當れり、是時徵明七十二歲なり。幅の上方に乾隆帝の題詩あり、曰はく

神明境裏謝塵緣。或坐松廬或泛船。可識置身斯地者。丹爐不守也成仙。

丁酉新春月御題

款下に乾、隆の印を鈐せり。

幅の上方右側に乾隆御覽之寶、石渠寶笈の二印あり。幅外裱の右方に賜本の一印と臣誥恭藏、富春董氏收藏書畫記の二印あり、左方に「道光二十六年四月署浙江溫州府知府玉環同知臣徐榮恭藏」と識して二印を鈐せり。卽ち此の幅は乾隆の當時、董蕃林誥に下賜せられ、道光に至りて徐榮の有に歸せしを知る。

徵明の眞蹟は今日尙其の乏しきを憂へす、吾齋藏する所亦鮮からさるも、疎密兼用の筆を以て蕭散閒逸の致を寫して、人を引いて勝に入るゝの槩あるに至りては、此の幅を推して甲觀とす。

文徵明雲山圖立軸

石渠舊藏

高四尺四寸　闊一尺七寸四分　紙本

墨畫。雨景山水。上方に款題して云はく

偶向空門結勝因。談無說有我何能。只應未滅元來性。雲水悠悠愧老僧。

戊辰三月十日、偶與堯民伯虎嗣業同集竹堂、伯虎與古石師、參問不已、余無所知、漫記此以識余愧、文璧

下に文璧印、文徵明印の二印を鈐せり、戊辰は正德三年にして徵明三十九歲なり。前に唐伯虎、後に朱堯民、吳嗣業の題詩あり左の如し。

春去柴門尙自關。那知櫻箏已闌珊。憑君寫出朝來景。靄靄濃雲疊疊山。　唐寅

我愛雲閒自來往。老僧心定笑雲忙。倏焉散去山亦靜。雲意僧心俱兩忘。　朱凱

渺渺雲封竹院深。閒來時得縱幽尋。今朝與客留題處。揮塵玄談媿道林。　吳奕

上方に乾隆御覽之寶、乾隆鑑賞、三希堂精鑑璽、石渠寶笈、宜子孫の五璽あり、左方下に商丘宋犖審定眞跡の長方印あり、卽ち石渠の舊藏にして、又宋漫堂の鑑賞を經たるを知る、更に藏印四あり。

文衡山の畫は、趙松雪に淵源せり。故に細筆のもの多し、偶〻疎筆のものあれは、人之を疎文と稱せること、猶沈石田の工細なるものを呼んで、細沈と云へるか如し。而して重きを韻致に置

く者は、古より疎文に左袒す。此の軸は米家の筆を倣ひて雨景山水を寫せり。卽ち疎文の一類に屬し、筆を用ゐること多からすして、春霖濛濛、烟雲變幻し、山巒濕潤の氣、人の衣袖を襲ふ、所謂畫外に畫有るものなり。

陳繼儒の書畫史に云はく「文衡山の寫せる雲山の一卷は奔放横溢し、後に七言律草書一首を題せり、其の末尾の二句に云はく山齋十日經過斷、搨得南宮水墨圖と。項希憲の家に藏せり。白石翁の三檜卷と敵手たるに堪ふ」と。王世貞の弇州書畫跋にも、亦文太史雲山圖卷の一跋を載せたり。云はく「文太史徵仲、諸生たりし時、黃博士應龍の爲に此の卷を作れり、畫は老米を倣へとも氣暈生色は遂に高彥敬に減せす」と、此の軸の爲に言へるもの、如し。

文徵明倣黃鶴山樵山居圖立軸

高四尺九寸五分　闊二尺一寸四分　絹本

著色畫。工細の山水なり。「嘉靖乙巳夏五月、徵明臨黃鶴山樵山居圖」と款識し、徵明印、停雲館の二印を鈐せり。右方下に玉蘭堂印の一印あり、亦衡山の圖章なり、邊幅に畢瀧秘藏、竹癡清賞の二印あるに徵して、此の幅は曾て畢竹癡の鑑藏たりしを知る。案するに嘉靖乙巳は徵明七十六歲なりき。此の老齡を以て此の細緻の大作を試みたるは其の精力の絕倫なりしこと驚嘆すへきのみ。

邢子愿は衡山の醉翁亭圖小卷に跋して云はく「今文待詔の書畫は寰中に滿てり、十中の九は臨摹なり。恨らくは鮑靚女を倩うて之を艾炙し、速に腐爛せしめさることを、壬寅の人日前一夕、此を覩て秀色撲撲眉睫に向ふを覺ゆ。畫は虞山老人よりも青く、書は吳興七寸蘭亭よりも寒し、これ當に薰するに都梁沈水の諸名香を以てし、鮑家靚をして技巧を施すに所無からしむへきなり」と。壬寅は萬曆三十年にして、衡山の死後未た五十年に滿たす。而も既に贋摹の紛紛たりしこと斯の如しとせは、今日其の眞蹟の獲難きは固より怪むに足らす、乃ち此の軸の如きは亦當に都梁沈水の諸名香を以て之を薰し、永く之を後昆に傳へさるへからさるなり。

文徵明老柏戲禽圖小軸

高一尺八寸　闊一尺九分　紙本

墨畫。溪流危岩の間を廻り、岩上に老柏四株あり、樹上に小禽を配せり。都て白描法を以て之

を寫し、意趣閒遠を極む。蓋し待詔の精作なり。款無く左方下に衡山の一印あり。宋の徽宗は能く白描を以て山水を畫けり。此の法久しく廢れ衡山復び之を用ゐたり。此の軸の如き卽ち是なり。樹木は點葉鉤葉、微に入り纖を極め、禽鳥の小なること蠅の如く、活きて飛はんと欲するの致あり。辛丑銷夏記に亦衡山の高樹棲鴉圖軸を載せたり、吳荷屋之を評して云はく「何の處にか烏無からん、亦何の處にか棲烏の樹、結茅の屋無からん、一たひ圖寫を經れは、遂に此の中の主人なるを覺ゆ。奉親の謹、讀書の樂、皆幅內に於いて之を見るへし。所謂る文人の筆、造化と功を同うす、特り寒林倦鳥を以て墨池の遊戲に供するのみにあらさるなり」と。此の老柏戲禽圖とは布局少しく異なりと雖とも其の意趣は相同し、卽ち兩者俱に衡山會心の畫境なるに似たり。

文徵明自書詞翰立軸

高五尺六寸六分　闊二尺一寸二分　紙本

大行草書、六行。詞一闋を錄せり云はく

拂拭殘碑、勅飛字、依稀堪讀。慨當初、倚飛何重、後來何酷。果是功成身死、可憐事去言難贖。

最無孤、堪恨更堪憐、風波獄豈不念、中原蹙。豈不惜、徽欽辱。但徽欽既返、此身何屬。千載休談南渡錯、當時自怕中原復。咲區區、一檜亦何能、逢其欲。

右調滿江紅、題宋思陵與岳武穆手勅墨本、書贈侍御虞山先生　長洲文璧徵明甫

と款識し下に雁門世家、衡山、文璧徵明の三印を鈐せり、文璧の款あるものは、衡山か壯年の筆なり。

衡山か一代書法の冠冕たりしは、固より論無きも、强いて其の短を言はゝ筆筆均淨、齊整に過きて變化に乏しきに在り、衡山は子昂を師法とせし所多く、而して子昂既に此の病ありき。包愼伯世臣之を論して詳なり、兩家の書を見む者の爲に左に節錄す。

吳興の書は筆、專ら平順を用ゐ、一點一畫、一字一行、排次項接して成り、古帖の字は體、大小頗る相逕庭せるものありて、老翁か幼孫を携へて行くか如く、長短參差たり、而も情意眞摯にして痛癢相關す、吳興の書は則ち市人の隘巷に入るか如し、魚貫徐行して先を爭ひ後を競へる色、人人面に見はる、安そ能く上下左右の空白をして字有らしめんや、其の盛んに數百年に行はれし所以はたゝ經生胥史に便なりしを以ての故のみ。然れとも竟に廢一つる能はさるは、其の筆平順なりと雖も、來去出入の處、皆曲折停蓄あるを以てなり。後の

吳興を學へる者は、極めて似たりと雖も、而も曲折停蓄は存せず、惟均淨を求めたり、是を以て一時經生胥史に宗尚せられたりと雖も、踵を旋さずして煙消火滅せり。

此の軸は衡山壯年の作なり、未だ子昂均淨の病に陷らず、却つて曲折停蓄の妙を領畧せり。羅叔言の舊藏にして叔言吾が京都に在りし日、常に相示して以て誇となせり。其の歸國せんとするに當り、余重價を出し、强いて索めて之を留めたり、蓋し文蹟の佳なるものは吾が邦古來之を見ること極めて尠く、摹本紛紛として人適從する所を知らず、乃ち眞蹟を留め以て日東墨苑の鑑眼を啓かむと欲する老婆心のみ。

文徵明南樓傷春詩立軸

高八尺一寸七分　闊一尺七寸三分　一　紙本

草行書三行。五言律一首曰はく

南樓三月盡。飛絮滿江城。野色煙中斷。斜陽雨外明。繞簷風燕燕。千樹煖嚶嚶。歲有傷春感。

兼茲白髮生。

「徵明」と款署し文印徵明、玉蘭堂印の二印を鈐せり、左方下に南陽白鼎父印、碧洛青嵩外史の二印あり。

衡山の書は初め子昂より出て、後山谷に入れり、今この軸を見るに山谷の骨、子昂の肉を兼綜して遒美絕倫、光彩人を射る、吳興復生まるとも當に一席を讓るなるべし、其の轉折波磔の妙に至りては、今人、退筆塚を成すとも恐らく其の萬一を彷彿する能はざるべし。衡山小楷の至精なることは說くを要せず、大字行草書に至りては風湧瀾翻、見る者をして神飛ひ魂消せしむ、所謂之を大にしては縱橫萬丈、之を細にしては毫芒を剖晰すこは、余衡山の書に於いて之を見る。

文徵明書刺客列傳卷

高七寸七分　長十六尺九寸五分　紙本

小楷書、史記の刺客傳を錄せり、字萬に近し、「嘉靖壬辰六月望、長洲文徵明書於停雲館」と款識して下に文印徵明、徵仲の二印、卷首に停雲の圓印を鈐せり、卷末に張鳳翼の一跋、拖尾に林則徐、廖鴻藻の跋あり。

張跋に云はく「楷法遒逸なること率更の九成化度に酷似せり、此の卷は十五城と雖も隻字を

して易へず」と、林跋に云はく「余嘗て待詔の補松雪書汲黯傳の自跋を見たりき、藝古に逮はざるを以て愧と爲すといへり、此の書の如きは之を鷗波に方ぶとも亦何ぞ多く讓らんや」と此の卷を熟覽するに、筆力の遒勁なること萬字に渉りて首尾一の如し。卷首七八字の損破ある外は、全紙毛病なく、墨色煥發し、精采人を射る、款識の年月に依れば、此の卷は衡山六十三歲の筆なり。衡山は祝枝山と與に、有明一代の書道の大宗たり。而して行草は枝山を優れりとし、楷法は衡山を勝れりとすべし、衡山の楷法は、淳古に於いて微しく枝山に遜れども、秀媚は遠く之に過ぎたり。特に此の卷の如きは、衡山小楷中の出色の作に屬す、況や其の書する所は、史記の一章なるをや、千古の名文と天下の名筆、之を一卷中に見る、翰墨の清福といふべし。

文徵明石湖月詠卷

高一尺六分　長七尺　紙　本

行草書、石湖觀月の七言絶句十三首。款識に云はく「八月十九日、書付彭嘉、甲午歲」と、下に文印徵明、衡山、停雲の三印を鈐せり、卷首に停雲、衡山居士の二印あり、甲午は嘉靖十三年なり、卽ち此の卷は衡山六十五歲の時、書して其の兒、文彭文嘉に與へしものにして、此の時文彭は三十七歲、文嘉は三十四歲なりき。衡山の書は動もすれば、均淨工整に失して雅韻を失へる誚あり、此の卷は處處に補書改竄の痕あり、蓋し匆匆の筆にして甚しく意を用ゐざりしものなり、其の意を用ゐざりし所に、却つて巧整の弊を免れ、婆娑翩翩として一段の天趣を見る、詩十三首の中、甫田集には僅に一首を載錄し、他は皆之を逸せり、左に其の四首を錄す。

憑誰斫却月中枝。盡放清香照酒巵。不恨一分猶未滿。要知月滿有虧時。
屋角銀河澹欲斜。故人今夕在天涯。只應不隔關河影。千里悠悠共月華。
群仙何處躡飛鸞。縹緲紅雲捧玉盤。曾在長安憶兒女。今緣兒輩憶長安。
去歲中秋强咯譁。自憐衰疾髮根華。少年散去衰弱在。獨倚南樓到月斜。

引首に許初の「石湖月咏十有三絶」の八大字あり、時款は庚申なり、卽ち衡山が此の卷を書せしより三十七年後の隆慶四年にして、正に我が邦の元龜元年、織田信長姉川に戰ひし年に當る、戰雲東瀛の天地に漠漠たりし時、彼に在りては承平風雅、復た寰宇事あるを知らざりき。時を同うすれども、所を異にせば、治亂の同じからざる斯の如し、古今俯仰、感慨無き能はざるなり。許初は字を元復、號を高陽といひ、學問文章を以て著はれ、特に大書に工なるを以て名ありき。

文徵明西苑詩卷

高九寸七分强　長二十尺九寸　絹本

朱絲欄行草書、凡て百四十九行。西苑十勝を咏ぜる七言律十首を書せり。十勝とは萬歲山、太液池、瑤華嶋、承光殿、龍舟浦、芭蕉園、樂成殿、南臺、兎園、平臺なり、款識に曰はく

今歸老林間、追思舊遊、藐不可得、偶檢舊稿、時一理詠、恍然如在廣寒太液之間、客有以織成朱絲絹索書者、輙錄一過、嘉靖乙巳八月廿又四日、去初遊之日、二十有一年、而余亦既老矣、

徵明

下に徵明印、停雲館の二印を鈐せり、時款を案ずるに詩の成りしは嘉靖四年乙酉にして、此の卷を書せしは嘉靖二十四年乙巳なり、卽ち衡山の七十六歲に當る、西苑十首は傳世數本あり、江村銷夏錄、石渠寶笈、停雲館帖、各之を載錄せり、而して其の歲月の異なること左の如し。

江村銷夏錄　嘉靖二十七年戊申

石渠寶笈　嘉靖二十八年己酉

停雲館帖　嘉靖三十一年壬子

衡山此の詩成りて後、之を錄せること一再ならざりしは、以て其の會心の作たるを知るべし、鎖夏錄所載の物は藏經紙烏絲欄本の卷にして、石渠寶笈の物は素箋本三十一頁の册なり而して吾齋藏する所は絹本の手卷なり、完好無瑕、特に喜ぶべし。

相傳ふ董其昌は衡山の書を評して「村家の女兒、强いて修飾を加ふるが如し、徒に其の陋を增すのみ」と云へりと。此の說固より遽に信すべからず、想ふに衡山の工整なる書を喜はざる者、名を玄宰に藉りて、詆毀を試みたるならむか、但衡山を以て玄宰に比するに、奇致雅韻は玄宰を優れりとし、遒美謹整は衡山を推さざるを得ず、而して此の卷の如き、矜鍊の筆に至りては、竟に子昂以後の一人たるを否むべからず。

文徵明書離騷經册

高六寸三分　闊三寸二分餘　紙本　計九幅

烏絲欄凡て小楷書、八十七行。屈原の離騷を書し、門人彭年に與へたるものなり。款識に云はく。

比歲爲孔加書離騷、僅得數行而疾作、遂置不省、及是稍閒、爲補書之、自戊戌抵今八年、年七十有六、日老日頹、目昏指弱、所書大小不倫、可笑也、嘉靖乙巳六月二日、徵明識、

徵明の小印を鈐せり、墨林子、神品、墨林、子京父印、虛舟等の藏印凡て九あり、後別幅に王澍、許乃釗、張祥河、外九名家の跋あり、王跋に云はく「此の書細なること蠅頭の如くにして寬綽清挺、直ちに率更の室に入れり、當時年已に七十有六にして、猶能く精詣なりしこと此の如し。吾れ年未だ六十ならず、而して惟書する能はざるのみならず幷に見る能はず、歎ずべきなり」と。此の册、秀勁端雅、洵に今古絕倫なり、今人年齡纔に五十左右を以てして早く既に心身衰耗し、頹然として耄境に入るもの多し、此の書を見て憮然たるもの、豈惟虛舟のみならんや。

文徵明書千字文册

刻入過雲樓法帖

高八寸八分餘　闊四寸六分　紙本　計四頁

小草書、凡て四十四行。「嘉靖乙巳秋八月二日、書于玉蘭堂、徵明」と款識し、徵仲、悟言室印の二印を鈐せり、首頁下に徵明の印あり、又吳平齋審定眞蹟の一印あり、後副頁に吳平齋の一跋、羅叔言の二跋あり、此の書は顧文彬の過雲樓法帖に刻入せる劇迹なり、衡山この時年七十六歲、神氣尙衰へず、小草を書すること猶大字を行るが如し、相傳ふ衡山は晩年に至るまで書に於いて一筆も苟もせず、日常の簡札すら少しく意に滿たざるものあれば必ず、再三之を更ふ、人或は其の草次の應酬を勸むるあれば、曰はく吾此を以て自ら娛むのみ、人の爲にするにあらざるなりと。其の書の老いて愈〻妙なりしは、蓋し是の故なり、此の册全篇千字、顆顆珠璣ならざる無し、之を子昂の墨蹟中に置くとも、人幾ど辨ずる能はざらん。

文徵明書七律八首卷

高九寸一分　長十六尺五寸　紙本

行草書、七言律詩八首。詩題は左の如し

午門朝見、奉天殿早朝、雨中放朝、雪後朝安門候朝、內直有感、冬日左掖門眺望、

還家志喜、閑居漫興

末に「丁未臘月廿七日、燈下漫書舊作數首、徵明」と款識し文印徵明、衡山の二印を鈐せり、曾在吳石雲處、粵人吳榮光印、荷屋鑒賞、吳榮光審定印、健庵眼福、潘印延齡の藏印あり。

丁未は嘉靖二十六年にして衡山七十八歳なりき。字、縱横奔放、天眞流露して、常に見る所の文跡に比し、一段の神趣あるを覺ゆ、蓋し衡山墨蹟の最上乘ならむ、詩も亦清麗誦すべし、今第七の「還家志喜」の一首を錄す、

綠樹成陰逕有苔。園廬無恙客歸來。清朝自是容疎懶。明主何曾棄不才。
林壑豈無放老地。煙霞常護讀書臺。石湖東畔横塘路。多少山花待我開。

文徵明書離騷九歌卷

高七寸五分　長八尺六寸　紙本

烏絲欄、小楷書、楚辭の九歌を書せり。凡て四千一百九十四字、款識に云はく

嘉靖壬子春三月既望、余習靜於停雲館、迸謝諸事、檢笥中、得懷梅茂學素紙、屬書離騷九歌久矣、小窓茶熟香濃、墨和神清、漫錄一過、昔王荆公嘗選唐詩、謂費日力可惜、余之爲此、豈時可惜而已哉、書以識愧、徵明時年八十有三

下に徵明の二字印、卷首下に停雲の小印を鈐せり、恭親王の跋及び徐琪の題字と詩跋あり。徐琪は光緒間の進士にして、翰林院編修、廣東學生に官たり。此の卷、衡山六七十歳前後の作に視ぶれば、秀勁に於いては稍〻遜れるが如きも、圓熟せる手法は亦た一段の佳趣を見る。衡山の曾孫、文從簡は曾て衡山の小楷落花詩册に跋して云はく「先公晩歳燭を燃して蠅頭の字を作り、虚夕無かりき、先公の楷法に二種あり、朝縉簪笏、莊蕭整嚴なるは金石の書なり、衫履蹁躚、韻致妍美なるは遊戯の書なり、若し一眼腔を以て觀ば、鹿を辨じて馬に失せん」と。此の卷の如きは所謂る衫履蹁躚に屬するものか非か、字字圓筆を用ゐ尤も宕逸の致あり。

文徵明自書詩帖卷

高九寸二分　長九尺一寸二分　藏經紙

行書七言律詩。思歸四首、春日郊行一首、秋日懷歸二首、次廬師陳韻二首、計九首、款識印記無し。張鳳翼の一跋あり、曰はく

右懷歸五首、郊行一首、思歸二首、次廬韻二首、皆太史衡山文先生作、卽其手書也、十詩未暇考其刻集存否、然書法精勁、可望而知其爲先生筆、不知何緣失去款印、故識其末、在具眼又何俟款印哉。　萬曆壬辰夏初、張鳳翼

是に據れば款印は萬曆の時、既に缺如せるを知るべし、但思歸の詩は五首ありしが如きも今

は四首を存するのみ、卷末に謙益堂鑒定眞蹟書畫印の一印あり。

吾齋衡山の精品を藏すること既に十數件の多きに上れり、而も尙此の無款の詩卷を棄てざる所以のものは、其の紙墨の特に尙ふべきものあるが爲なり。意ふに衡山の短は動もすれば巧整に過ぐるに在り、而も此の詩翰は興に乘じて筆を揮ひたるか、技工の跡なく姿致殊に饒し、加ふるに用紙は金粟山藏經紙にして古澤油然たるを以てす、之を展玩すれば宛も宋元の舊蹟に接するの感あり。蓋し衡山遺筆中の尤物たり、詩亦淸麗誦すべし、甫田集には皆之を逸せり。今懷歸の一首を錄す、左の如し。

年移病迫久應還。貪戀君恩尙强顏。賸有黃塵隨馬足。未忘靑瑣點朝班。
申生不去終鉗市。王仲何如只抱關。連日驚魂殊不定。盡隨鄕思繞吳山。

文徵明惠山茶會圖卷

高七寸九分　長二尺二寸七分　紙本

着色畫。岡陵の下、平坡あり、茅亭一宇、雜樹十餘株を配し、亭內の爐前に兩人對坐し、樹下に一童あり茶を煮、雅客三人逍遙の狀を作す。人物高雅、布景開豁、凡て細筆鈎染して而も卑俗に陷らず、書卷の氣、人の眉宇を撲つ、正に是子昂の手法なり。卷首に惠山茶會圖と署し文印徵明、玉蘭堂の二印を鈐せり、宮爾鐸審定、宮氏農山鑒定等、宮氏の藏印五方と、呂士淳印、紉秋、神品、鄧邦靖觀、震佑印信、程氏家藏、小滄秘玩圖書、定心養性之齋等の鈐印あり。引首に行書「惠山茶會」の四字あり、款を蒲澗と署し于漢の一印を鈐せり、小滄居士、紉秋の二藏印あり、卷後別幅に蔡羽の「惠山茶會序」あり、楷書、烏絲欄、四十行、款識に云はく「正德十三年戊寅春三月朔旦林屋蔡羽書」と九逵、包山蔡羽の二印を鈐し、藏印九方あり、次いで文徵明、蔡羽、湯珍、王守、王寵の詩翰を合裝せり、左の如し

文徵明詩翰　長八尺六寸行草書、八十三行、款識に云はく「西來共得拙詩十有二首、錄上蒲澗先生、用見一時鄙況云爾、門生文徵明頓首」と、文印徵明、悟言室印の二印を鈐し、幅首下に停雲生、悟言室印の二印あり、藏印十方あり。

蔡羽詩翰　行書、六十一行、鄙詩十一首呈蒲澗老先生改教、諸生吳郡蔡羽」と款識し、九逵、林屋山人の二印を鈐せり、藏印六あり。

湯珍　朱絲欄、小楷書六十一行、詩十六首、款識に「右小詩呈蒲澗先生、求教和、吳郡諸生湯珍頓首再拜稿」とありて一印を鈐せり、藏印あり。

王守詩翰　草行書、三十七行、五律五首「吳郡王守」と款を署し、王履約印、辛夷館印の二印を鈐せり、藏印七あり。

王寵詩翰　草行書、三十八行、五律五首、款に云はく「吳郡諸生王寵頓首藁呈」と王寵之印王印履人の二印を鈐せり、藏印十三あり。

蔡羽の序文に依れば、以上の五友夙に惠山に遊ぶ約ありて未だ果さず。正德十三年二月十八日、初めて武進の學諭蒲澗鄭先生の館に集まり、翌十九日、相携へて惠山に到り、茗筵を張りて茶を啜り詩を賦し、以て一日の高懷を叙せしなり、此の時衡山は四十九歲、履吉は二十五歲なりき、而して卷中の詩はみな鄭先生の家に至る途中、及び惠山に在りて賦せし所に係り錄して鄭先生に贈りしものなり。引首の款の蒲澗は卽ち鄭先生なり。

拖尾に吳大澂、外數家の跋あれども今は之を錄せず。惠山茶會圖卷は過雲樓書畫記亦之を載錄せり、但畫の圖局、及び畫中人物の數、皆此の卷と異なり。又紀遊の詩に衡山、履約の二家を缺けるのみならず、諸家の書は皆楷書にして、此の卷の行草書なると同じからず、卽ち過雲樓所載のものは全く別本たるを知るべし、吳大澂も亦是に言及し「得意の詩畫は、之を作ること一册ならざるべし」と云へり。

衡山、履約、履吉等は有明一代の文苑の大家なり、其の片紙斷簡も吉光の片羽に異ならず。然に此の卷は諸家會心の詩畫を併收して其の長さ數十尺に及べり、珠璧輝映し、光彩陸離たり、人をして諦視するに堪へざらしむ、眞に翰墨の大觀なり。

文徵明菊圃圖卷

高七寸　長十尺五寸　絹本

青綠著色畫。秋景山水なり、配するに人馬、屋宇、橋梁を以てし、末段に菊圃あり、數人賞菊の狀を寫せり、用筆細緻、子昂に彷彿たり。卷首に「菊圃圖、嘉靖癸未春日、長洲文徵明製」と款題し文印徵明の一印を鈐せり、卽ち衡山五十四歲の刻意の作なり、卷末に二詩を題せり云はく

幽花一種及時新。始信司花別有神。樊圃正當搖落後。典刑始見老成人。
西風步障寒金谷。霜月霓裳冷玉眞。紅紫依然蜂蝶在。九秋何必減三春。
忽見籬花兩種新。居然栗里舊風神。多君珍重黃金贈。老我衰遲白髮人。
自信風霜同氣味。未妨盆盎失淸眞。從今莫作寒英看。便是江南有脚春。

款に「衡山文徵明」と署し悟言室印、衡山の二印を鈐せり、引首に清道人の篆題あり、卷尾に吳俊卿の跋あり、云はく「明の謝在杭の五雜俎に云ふ文徵仲遠くは郭熙を學び、近くは松雪を學べり、而して得意の筆は往往工緻を以て勝り、其の氣韻神采に至りては一時に獨歩せりと。今此圖を見るに細意熨帖、精采照暎、誠に在杭の云へる所の如し、蓋し工緻の尤なるものなり」と。山靜居論畫に云はく「衡山の書畫は駸駸乎として松雪の室に入れり、然れども其の自ら一種情和閒適の趣を具し、以て吳興の妍麗なるに別てり、亦此の老が人品高潔なるに由る」と。此の菊圃圖及び惠山茶會圖等は卽ち子昂を學んで、而して出藍の妙あるものなり。

文徵明書畫合璧卷

畫　高一尺二分　闊一尺七寸六分　淡黃箋　計五幀

書　高一尺二分　闊一尺七寸六分　冷金箋　計五幀

書畫十幅を裝して一卷と爲せり、畫は水墨の花鳥、詩は行草書なり、畫を先にし詩を後に次せり。

第一幅　蘭花

雙鈎にて蘭を畫き、配するに石を以てせり、右方下に文印徵明の一印を鈐せり、藏印一あり。

第二幅　七律一首

翠衿縞袂玉娉婷。一咲相觀老眼明。香瀉玉杯朝露重。塵生羅襪晚波輕。
漢皋初解疊疊佩。洛浦漸通脈脈情。剛恨陳思才力盡。臨風欲賦不能成。　徵明

下に文徵明印、文仲子の二印、前に停雲の圓印を鈐せり、藏印二あり。

第三幅　蘆雁

荻蘆蕭蕭、群雁飛翔の景を寫し、右方下に文仲子の一印を鈐せり、藏印二あり。

第四幅　七律一首

荒坡日落沙渚黃。新霜十里菰蒲蒼。沙平日落雲影薄。雁飛漠漠紅茫茫。
江寒天遠西風急。沙上霜晴爪痕濕。月明不惟雁奴驚。江湖何處無繒繳。　徵明

下に文徵明印、衡山の二印、前に停雲の印を鈐せり、藏印二あり。

第五幅　墨梅

一株梅花、枝疎にして花大なり、左方下に衡山の印を鈐せり、藏印一方あり。

第六幅　七律一首

林下僊姿縞袂輕。水邊高韻玉疊疊。細香撩鬢風無賴。瘦影涵窓月有情。
夢斷羅浮春信遠。雪消姑射曉寒清。飄零自避芳菲節。不爲高樓笛裏聲。　徵明

下に文仲子、衡山の二印前に停雲の印を鈐し、藏印四方あり。

第七幅　古木寒鴉

古木一株、寒鴉八を畫き、下に土坡苔石を作れり、右方下に鈐印の痕あれども、破壞して印文辨ずべからず、藏印一方あり。

第八幅　七律一首

寒原秋高日欲落。欲栖未栖鴉漠漠。枯枿烟空脫葉鳴。巖城月出霜萃薄。
霜清月冷樹離離。正是驚禽欲寒時。會有人占丈人屋。微風莫自裊空枝。　徵明

款下に文仲子、衡山の二印、前に停雲の一印を鈐せり、藏印三方あり。

好古堂家藏書畫記に古木寒鴉の一軸を載錄せり「嘉靖辛亥徵明作時年八十二」の款署あり、而して題する處の詩は卽ち此の七律なり、此の詩畫は衡山會心の作なるを知るべし。

第九幅　木蘭

數枝の木蘭、花盛に開けり、左方下に文徵明印の一印あり。

第十幅　五律一首

碧桐已蕭蕭。氷谷流沈沈。獨行蒼莽閒。犬吠人蹟絕。旭日穿樹林。青煙忽消滅。
時看殿巖風。吹落松上雪。
戊午春偶見古紙數翻、拈筆爲戲墨、因閱舊作、漫錄一過以刻、徵明時年八十有九

文印徵明、衡山の二印、前に停雲の一印を鈐せり、藏印五あり。

此の卷收むる所の書畫は、衡山八十九歲、卽ち歿する前年の作に係り、最晚最精の品たり。而して其の畫は習見する所の山水にあらずして花卉禽鳥なるは、倍〻以て珍とせざるを得ず。弇州書畫跋に云はく「癸丑、余地を吳中に避け、一日閒を以て文太史に謁せり、太史坐隅に蘭石を畫き畢れり、秀色朗朗、人を射るを覺ゆ」と。癸丑は嘉靖三十二年にして衡山時に八十四歲、卽ち此の卷を畫きし戊午に先たつ五年なり、衡山晚年には蘭石を畫くを娛めり。

文徵明溪山銷夏圖卷

秋夜詩合裝

高八寸九分　長五尺九寸八分　絹本

墨畫、疎筆。款識に云はく「此余數年前所作、忽於舟中見之、感歲月之云邁、嘆聰明之不及、輙識其後、徵明」と、文印徵明、雁門世家の二印を鈐せり、子埜、槇生等の藏印六あり。此の畫は所謂疎文に屬するものにして氣韻を以て勝れり、衡山は嘗て畫を沈石田に學べり、故に其の疎筆のものは頗る石田に類せり、而して石田は魄力を以て勝り。衡山は圓潤を以て長ぜり、但其の韻致の横溢せるに至りては兩者軒輊無し。卷後に秋夜詩を合裝せり、行草書、「銀河垂空秋耿耿」より「不愁明月無今夕」の結句に至るまで凡て二十一行、款識に云はく「右秋夜與客小飲、起步中庭、月色如畫、碧桐蕭蕭、流影在地、人境俱寂寥、僮子煑茗啜之、不覺至丙夜、東坡云、何夜無月、何處無竹柏影、但無我輩閒寂耳。徵明」と、文印徵明、停雲館の二印を鈐せり、子埜、朱氏元介、之蕃等の藏印あり。引首に王穀祥篆書「衡翁三絶」の四字、拖尾に彭年と清の黄易、外二家の跋あり、黄跋の一節に云はく「文跡は疎筆殊に少く、當時既に極めて珍貴せらる、況や今日をや」と。藏印の子埜は陳芹、朱元介は朱之蕃にして、俱に有明の名家なり。

文徵明横塘聽雨圖立軸

石渠舊藏

高二尺五寸二分　闊一尺一寸八分　紙本

淡墨畫。上に一帶の平岡を畫き、下に江流を寫し、鴻雁十數、飛翔飲啄の狀を爲す、江岸坡上に老木兩三株あり、一舟其の下に泊し、人篷底に横臥せり。筆意簡疎にして畫趣高逸、澹乎として塵外の想あり。款題に云はく

蔡天啓嘗作平岡老木、授李伯時、令於餘地加遠水歸雁、作扁舟以載天啓、且賦詩曰、鴻雁歸時水拍天、平岡老木尚含煙、借君餘地安漁艇、著我寒江聽雨眠。伯時不能竟、他日王渙之以示宗子令戩、卽取筆點染、如詩中意、天啓他日汎舟宿横塘、遇雨聞雁、因復爲詩云、平野風煙入夢思、殷勤作畫更題詩、扁舟臥聽横塘雨、恰遇江南歸雁時。

徵明偶與子傳、閱墨莊漫錄、因補小圖、書其上　乙巳四月

下に徵仲の印を鈐せり、又乾隆御覽之寶、石渠寶笈、乾隆鑑賞、三希堂精鑑璽、宜子孫の五璽と南海孔廣陶審定金石書畫印、懷民珍秘、嶽雪樓記の三印あり。

此の軸は嶽雪樓書畫錄之を載錄せり、卽ち嘗て乾隆の内府に入り、後ち出てゝ孔氏の有に歸せしを知る。衡山の畫、趙子昂を倣へるものは細緻に過ぎて却て韻致を傷ひ、沈石田を法とせしものは往往疎筆に流る、惟元の四大家より上、董巨を追蹤せしものに至りては、畫境筆

意、斬然として大家の風度あり。此の軸の如き卽ち是なり。年來見る所の衡山の眞蹟、當に之を以て第一に推すべし。題識の書、二三改竄の痕あれども、幸に雅觀を妨げず、其の整正の技巧を弄せざる所に却つて天眞の流露せるを見る。

北京の寶沈盦熙は、此の軸の匣に題するに「江南歸雁圖」を以てせり、畫境を以て推せば此の題名の寧ろ可なるを覺ゆれども、今暫く舊題を踏襲す。

大正甲寅六月、東京府美術館に日華聯合繪畫展覽會を開けり、民國の畫家十數名、其の作品を携へて來り會しぬ、余往きて觀るに藏する所の宋旭槐下高士圖と此の横塘聽雨圖の臨本あり、前者は王益庵夢蓀、後者は張南湖晉福の作にして原本尙北京に在りし時の臨摹に係れり、神采未だ到らざれども畧〻形似を得たり、依て購ひ歸りて之を原圖に配せり。之を一堂に併觀して、彌〻古人の及び難きを知れり。

文徵明空山寒澗圖

高二尺一寸　闊一尺二寸一分　紙本

墨畫。嵯峨たる巖巒の下に溪流あり、懸泉落ちて之に注ぐ、溪畔の平坡に枯樹四株を配し、人あり其の下に坐して谿山を眺む。疎筆を以て寫し微しく丹赭を加ふ。款題に云はく

霜後平林含古色。雨餘寒澗雜風琴。空山歳晚無車馬。一塢斜陽獨自吟。甲辰秋日　徵明

下に文印徵明の印を鈐せり、左方下に惟庚寅吾以降、の一印あり、亦衡山の印記なり。王犖、季青鑑定、柯庭家傳神品等の藏印六あり。王犖は字を耕南、號を稼庭と云ひ、王石谷と同時の人なり。山水は石谷を倣ひ、多く摹本を作りて利を專らにせり、石谷爲に深く之を恨めりと云ふ。季青は汪文柏の字にして柯庭は其の號なり、浙江桐鄉の人、乾嘉の閒、兵馬司正指揮に官たり、詩書畫に工にして尤も鑑定に精しかりき、又收藏甚だ富み、古香樓を築きて之を藏せりと云ふ。年來見る所の書畫に季青、柯庭の藏印あるものあり、多くは其の精品なるに徵して其の鑑眼の高かりしを知る。

款識の甲辰は嘉靖二十三年にして卽ち衡山七十五歳に當る、圖は疎文の一種に屬すれど溪水のみ時に細筆を以て之を寫せり、山石は丰骨峻峭にして直ちに唐伯虎に逼れり。衡山の作、子昂より出て〻換骨脫胎せるものは、筆法の細膩と意境の靜穆を以て勝り、其の疎筆なるものは、磊落にして書卷の氣饒し、疎文の愛すべきは此に在り。乃ち風骨を以て論ずれば此の軸の如きは蓋し衡山出色の作といふべし。

文徵明煙雨釣舟圖立軸

石渠舊藏

高三尺七寸二分　闊一尺　紙本

墨畫。皴は北苑を法り、樹葉と點苔は梅道人を倣ひ、惟人物舟楫水流に子昂細描の筆を用ゐ、魄力沈雄にして氣勢磅礴たり。「戊寅七月徵明」と款識し文印徵明、衡山の二印を鈐せり、乾隆御覽、乾隆鑑賞、石渠寶笈、三希堂精鑑璽、宜子孫の五璽と、潞河張翼藏書畫記、文有、潞河張翼燕謀所藏の三印あり。戊寅は正德十三年にして、衡山時に四十九歳なり。衡山は壯年好んで疎筆の山水を畫き、董巨を追蹤し、二米に神游し、吳鎭、王蒙を一爐に熔冶して之を毫端に發せり。故に其の會心の作に至りては、石田伯虎と雖も、時には後に瞠若たるものあり。石田は大筆揮灑して縱横の氣を負へるもの多く、衡山は組織細密にして筆意閒雅なるを常とす。故に偶〻石田に細謹なるあり、衡山に疎豪なるあれば世乃ち疎文細沈と稱して之を尙べり、此の軸と雲山圖とは疎筆の文畫中に在りて特に登峯造極の傑作と爲す。吳思亭の論畫絕句に石田を詠じて「脫手林巒墨尙新。倍因渾厚見精神。直敎董巨傳心法。五百年來無此人」と云へり。而も衡山の此の軸は必ずしも石田をして其の盛譽を擅にせしめざるべし。

文徵明枯木竹石圖立軸

高三尺五寸一分　闊一尺九分　紙本

墨畫。平坡の上に一大苔石あり。前に枯樹二株、後に疎竹兩竿を寫せり。寸大の行書を以て款題して云はく

海燕飛飛四月天。名園春筍大如椽。文同老去饞應甚。安得胸中飽渭川。

春潛園筍大發、欲求兩束、輸以小詩先之、亦足噴飯也。　徵明癸巳四月十七日

下に文印徵明、徵仲の二印を鈐せり。癸巳は嘉靖十二年にして、衡山六十四歳なり。衡山の山水花卉の細緻なるものは子昂を法とし、簡疎なるものは梅道人を倣へるもの多し。此の軸は點苔淋漓、竹葉紛披。款を掩うて之を見しめば人皆梅花庵主の筆となさむ。論畫者云はく「蕭疎幽淡、風雨離披、蒼茫の中に於いて姿態を見るは是れ元人の秘密藏なり」と。衡山は之を心に得て手に應ぜり。乃ち此の軸の如く神趣盎然、高逸疎散の致を極むる所以なり。

唐寅倣李希古山水立軸

高四尺六寸七分　闊二尺五分　絹本

著色畫。細緻の筆を以て山樓野橋、人馬樹石を寫せり、款題に云はく

野店桃花紅粉姿。陌頭楊柳綠烟絲。只應送客東城去。過却春光摠不知。　唐寅

唐寅私印、唐白虎の二印を鈐せり、左方下に眞蹟、程氏可亭珍玩の二印あり。

唐伯虎の山水は李唐を宗として其の神髓を領略せり。故に世に伯虎の畫を僞りて希古と稱し、或は希古の畫を誤りて伯虎と爲す者あるに至れり。以て其の筆意の極めて相近きものあるを察すべし、丹青志に云はく「唐寅は畫法沈鬱、風骨奇峭なり、庸瑣を刋落し、務めて濃厚を求め、連江疊巘、纏纏として窮まらず、信に士流の雅作、繪事の妙詣なり、評者謂らく其の畫遠く李唐を攻めたり、偏帥に任ずるに足る」と。圖繪寶鑑續纂に云はく「唐寅は山水人物、妙に詣らざるなし、劉松年、李晞古の皴法より得たりと雖も、其の筆資秀雅にして藍よりも青し」と。是等の諸論を聞きて而して此の軸を觀れば畧〻伯虎の面目を窺ふことを得べし。

唐寅峯前千澗圖立軸

高四尺一寸二分　闊一尺四分　絹本

著色山水畫。款題に云はく

峯前千澗玉潺潺。落日層層樹裏山。一段勝情誰領得。幽人虛閣俯滄灣。　晉昌唐寅

下に唐白虎の印を鈐し、右方下に南京解元の一印あり。是亦伯虎の圖章なり、左方下に審定眞跡、梁溪華氏家藏の二印あり。

方蘭士云はく「六如は李、劉、馬、夏に原本し、而して和するに天倪を以てし、運するに書卷の氣を以てせり。故に畫の北宗を法とせるものは皆作家の面目多きに獨り子畏出て〻而して北宗に雅格あり」と。蓋し南北を筆端に陶冶して功力韻致、兼到れるものは、前に沈石田あり、後に唐伯虎あるのみ。此の二家が餘子に超越せる所以も亦此に在るを知らざるべからず。

唐寅宜男圖立軸

高一尺九寸三分　闊一尺五分　紙本

水墨を以て萱草を寫し、右方上に「宜男圖、吳郡唐寅」と款署して、南京解元、唐寅私印、唐伯虎の三印を鈐せり。紙色淨白、墨氣生發す、左方に靈巖山人秘笈之印、臥庵所藏の二印、右方に第一希有、休甯朱之赤珍藏圖書の二印あり。朱臥庵之赤は明末著名の收藏家にして、臥庵

書畫目の著あるは人の知る所なり。伯虎は山水人物、花卉翎毛、悉く能くせざる無し。女兒嬌圖、墨君圖、竹枝雙雀圖等今に傳はれるもの枚擧するに遑あらず。吾齋藏する所に梅石圖と此の宜男圖あり、皆簡淨の筆にして高逸の致あり。

唐寅採藥高士圖立軸

高三尺一寸七分　闊一尺九寸五分　紙本

水墨を以て採藥歸來の高士を描けり、其の高邁絶倫なること殆ど塵寰のものにあらず、款題して云はく。

高泉落澗玉淙淙。採藥歸來意自冲。人爲利名閒不得。吾能此地著吾踪。　晉昌唐寅

下に唐子畏圖書、唐白虎、唐寅私印の三印、前に禪僊の印、左方下に吳趨の圓印を鈐せり、又右方下に仇氏實父の小印あれども恐らくは後人の追印ならん。邊幅に羅叔言の藏印二あり、叔言題籤に識して云はく「嘗て子畏先生の小像を見たりき、圖中の人と酷肖せり、知る是即ち先生の自寫眞なることを」と。亦一說として見るべし。

前人、唐伯虎と仇英とを比較して云はく「明代に人物を畫けるものは惟仇唐兩家を最と爲す。十洲は宋人の矩矱を謹守し、設色精妙にして尤も不傳の秘を得たり。唐子畏は則ち別に一種の仙風道骨ありて、其の神妙の處は更に筆墨の外にあり、胷中多く數百卷の書を藏せり、故に下筆自然にして、迥に人の如くならず。精詣なること仇の如きも尙當に舍を避くべし」と。蓋し至論なり。

唐寅秋林薄暮圖立軸

高四尺二寸四分　闊二尺一寸九分　絹本

淡著色畫。枯木寒巖の閒、夕陽將に沒せんとして、騫驢遲遲たり、荒涼の氣、人に逼る、款題して云はく

道人歸去驚新雁。薄暮遲行恨騫驢。窓裏朱黃閑作戲。長安塵土憶馳驅。

蘋門唐寅爲夢賓姜儀部寫

下に唐子畏圖書、唐寅私印の二印、前に吳趨の圓印を鈐せり、右方下に桃里の小圓印と六如居士の方印あり、又天籟閣、項子京家珍藏、項墨林鑑賞章、載銓私印、行有恒堂審定眞蹟、曾在

定府石有恒堂、張則之、韻石主人珍賞、笪印重光、紫環道人、希眞、三萬六千琅玕室、棠村審定、蕉林等の藏印累累たり、卽ち明の項元汴より淸の笪重光愼郡王、梁淸標等諸大家の鑒藏を經たるを知るべし。

伯虎嘗て關山勒馬圖を畫きて一詩を題せり、其の圖は余未だ之を睹ずと雖も、詩意を以て畫境を考ふるに、此の秋林薄暮圖と極めて相似たるがごとし、想ふに伯虎は少くして志を仕途に得ず、老いて倍〻日暮道遠の思に堪へず、乃ち好んで此の種の境地を畫き以て其の胸裏の悶悶を洩せしにあらざるか、詩は左の如し。

九月新霜貼地飛。木棉重補舊征衣。家園萬里無書到。勒馬關山看雁歸。

唐寅應眞圖立軸

高四尺二寸一分　闊一尺九寸九分　紙　本

著色畫。一石屏を寫し、石後に芭蕉を添へ、石前に箕踞瞑目せる羅漢を描けり、描線工細にして、氣韻崇高、蓋し伯虎の傑作なり。右方上に「正德辛巳夏五月望日、吳門唐寅寫於桃花庵」と款識して唐伯虎、唐居士の二印を鈐し、更に左方下に六如居士の大方印を鈐せり。時款に依りて此の畫の伯虎五十二歲の作なることを知るべし。右方下に聽颿樓、潘季彤鑑賞章の藏印あり。

珊瑚網に董其昌の評論を載せて云はく「伯虎は李晞古を學べりと雖も亦李伯時にも深かりき、故に人物、舟車、樓觀、工ならざる所無し」と。此の軸筆意は全く龍眠を追蹤せりと雖も高逸超俗の神趣は龍眠も及ぶ能はざるものあるを覺ゆ、伯虎は少くして志を仕途に絕ち、詩酒翰墨に放浪して身を終へき、故に其の筆墨に厭世嘲俗の意を寓せるもの多し。嘗て高士觀書圖を畫き上に題して云ふ「束書杯茶、氍毹就地、吾事辨矣、不憶世間有黃塵汗衣朱門臭酒也」と。此の胸懷ありて始めて其の畫く所に仙風道骨あるを得べきのみ、固より尋常作家の到る能はざる所なり。

唐寅梅花立軸

高二尺六寸四分　闊一尺二寸四分　紙　本

沈石田、文衡山、唐伯虎の諸家、皆花卉を能くせしも、若し風韻を以て論ずれば、伯虎の右に出づる者無し、特に畫梅の一途に在りては丰神獨絕にして、石田衡山の諸老をして低頭却走

せしむるものあり。此の軸、墨畫、土坡の下に疎梅を畫き、上に寸許の行書を以て七言長篇一首を題せり、曰はく

北風著面刮起霜。蜡月何處尋紅芳。尺杖挂短湘竹節。雙鞋踏盡江莎芒。溪橋突兀田塍裂。雪裡梅開梅勝雪。不妨地上有微氷。且是江南好明月。千古誰能賞丰韻。一朶偏先漏春信。不獨何遜解吟詩。不獨壽陽能裏鬢。三更且貯雁足缸。半斗再洗螭頭觴。高致久契梅與雪。微名素輕公與王。一年若得長寒冷。四季便拚長不醒。買田築室老西湖。密種梅花八千頃。

「吳門唐寅」と款を署し、唐伯虎、南京解元の二印を鈐し、別に右方下に六如居士の大方印を鈐せり、藏印二あり。

畫梅清瘦、詩書迭宕、洵に三絶と稱すべし。

唐寅水閣觀秧圖立軸

高五尺六寸八分　闊二尺八寸八分　絹本

墨畫。層嶂大江の邊に農人灌田し、垂柳の下なる水亭中に人あり、觀望の狀を爲す。山容樹態、遠近濃淡宜きを得。平遠は趙大年の如く、山石は劉松年に似たり。殊に前面の垂柳二三株は風致絶倫にして人物八九も亦古逸を極めたり、款題して云はく

秧馬嘈嘈曉露濃。大鵬車處鼓鼕鼕。主人好倚欄干看。辛苦耕耘是我儂。　唐寅

下に六如居士の印を鈐せり。

六如の山水、巧緻に過ぎたるは往往韻致を缺ける憾あり。此の軸の如きは尤も風格逸韻を以て勝れり、六如の傑作なり。

有明四大家の中、仇英は暫く論ぜず。他の三家に就いて之を言へば、其の眞蹟の尤も獲難きものを唐伯虎とす。宋漫堂嘗て論畫絶句を作り、咏じて云はく

畫手吳中舊壇長。衡山大雅石田蒼。解元眞跡今寥落。片紙尚生琬琰光。

伯虎の眞蹟は當時既に流播の甚だ多からざりしを見るへし。吾齋今その眞精なるもの數件を藏弆す。貧叟暴富の感無くんばあらず。

唐寅夢筠圖卷

石渠舊藏　乾隆御題

高九寸七分　長三尺四寸九分　紙本

墨畫。危巖嶙峋たり、幽澗潺潺たり、後に野竹十數竿あり、平坡の上に一高士、榻に倚りて假

眠し、侍童爐前に踞して茗を煎る、人物器什は白描を用ゐ、卷末に寸大の楷行書を以て款題して云はく

聞說君家新闢庭。參差滿種粉梢青。炎時靜坐不覺暑。晝日仰眠常見星。
一點虛心通曉夢。百年手澤與忘形。秋來四壁聲如雨。帳掩薰爐獨自聽。

吳趨唐寅爲夢筠作小圖長句

下に唐白虎、六如居士の二印、卷首下に南京解元の長方印を鈐せり、上方に乾隆帝は小行書を以て一詩を題し「乾隆御題、卽用唐寅元韻」と款して會心不遠、德充符、徵觀の三璽を鈐せり、乾隆の五璽具存せり、又安儀周家珍藏の印あり、卽ち安麓村の舊物たりしを知る、拖尾に董其昌の一跋あり、曰はく

一泓湖州畫裏詩。蕭蕭疎篠兩三枝。朝來村水帆前雨。正是龍孫解籜時。
唐六如畫夢筠圖、娟秀姿態雖李龍眠復生、不能勝此圖、曰觀系以一絕、丁卯四月朔玉峯道中識、其昌

下に宗伯學士、董氏玄宰の二印を鈐せり、怡親王寶、思原堂、麓村の三印あり、董其昌の跋に次いで清の梁詩正、汪由敦、蔣溥、莊有恭、嵇璜、張若澄等の乾隆御題を和せる詩跋あり。

此の卷は墨緣彙觀續錄、大觀錄、皆之を載錄せり、大觀錄に評して云はく「人物の白描は伯時の如し、樹石の皴染は焦墨水墨もて、淸眞瀟灑たり、董華亭は斤斤として妄に許可せず、龍眠復生まるとも勝る能はじと謂へるに至りては、夫れ豈に浮譏ならんや。」

唐寅聽秋圖卷

附吳寬沈周聽秋詩文

唐寅畫　高八寸七分　長三尺六寸四分　紙本
吳寬序　高九寸　長三尺三寸五分
沈周詩　高八寸三分　長一尺三寸六分

水墨淡著色畫。江岸岡阜の下に茅屋二宇を構へ、屋を繞れる叢竹老樹、皆秋風淅瀝の狀あり、屋內に人あり、孤坐惆悵に堪へざるが如し。凡て細筆皴擦し、江山淸曠、竹木蕭颯、洵に南畫の絕技なり。款に云はく「吳趨唐寅畫」と、下に唐寅私印、唐白虎の二印、卷首下に子唐畏圖書の一印を鈐せり、朱之赤鑒賞の藏印あるに徵して朱臥菴の舊藏たりしを知る、引首に許初の篆書「聽秋圖」の三字ありて、帝高陽之苗裔、許元復氏の二印を鈐せり。

後別幅に吳寬の文あり、烏絲欄、行書、二十九行、前に聽秋詩序と署し、後に款識して云はく

「弘治五年歳次壬子四月二日、奉議大夫左春坊左庶子兼翰林院侍講學士長洲吳寬撰」と、太史氏、延州來季子後、吳印原博、長州吳氏の四印と幅首に延陵の一印を鈐せり。此の時、原博五十八歳なりき、下に修竹書房の一印あり。

次に沈石田の行書、聽秋詩七律一首あり云はく

白頭兒子耳能聰。　欹枕無眠悵恨中。　蕭瑟千林風落木。　凄凉四壁露吟虫。　還欵磬欵心相接。　得與幽明夢自通。　総是哀思緣罔極。　何人作賦擬歐公。　沈周

下に沈氏啓南、白石翁の二印を鈐せり。

吳匏庵の序に依れば、吳中に願佶字は端甫といふ者あり、父母秋に當りて殁せしかば、秋到る毎に戚戚として悲に堪へず、聽秋を以て其居に顔せり。時人詩を作りて之を賞揚すること數十篇に及び、匏庵卽ち其の序を作れりと云ふ。詩は今存するもの僅に此の沈石田の一詩のみ、想ふに他は概ね大名の士にあらずして遂に割棄の厄に逢ひたるならん。

唐寅落花詩卷

高一尺二分餘　長八尺九寸　紙本

行草書。六十行、七言律詩凡て十首。「唐寅」と款署し、下に白虎、唐寅私印、六如居士の三印と卷首に南京解元の一印を鈐せり、今その詩二首を掲ぐ

不須惆悵緑枝稠。　畢竟繁華有斷頭。　夜雨一庭爭怨惜。　夕陽半樹小淹留。
佳人蹈處弓鞵薄。　燕子銜來別院幽。　滿目春光今亦老。　可能更管鏡中愁。」
歌酒闌干事已非。　玉人惆悵捲羅幃。　可堪荏苒爭先謝。　更不躊躇各自飛。
盡掃庭枝風歛怨。　偶黏屋網雨衝圍。　今朝蝶似長安客。　羞見殘春寂寞歸。」

伯虎は天才を以て時に合はず、詩酒に縱遊して身を終へき。其の詩に悽惋の調多きは是が爲なり、靜志居詩話に云はく「六如は明時に淪落し、恒に畫を賣り活を爲せり。故に其の詩に云ふ、領會皇都第一名、猖披歸臥舊茅衡、立錐莫笑無餘地、萬里江山筆下生と、又云ふ、青衫白髮老癡頑、筆硯生涯苦食艱、湖上水田人不要、誰來買我畫中山と、之を誦するに悽然として以て悲しむに足る」と。今此の落花十首を讀みて坐に竹垞と其の感を同ふす。

六如の書は清挺絶倫にして當時衡山枝山等と俱に名聲天下に重く、王弇州は評して子昂の堂府に入れりと稱せり、唯今世其の書を云ふ者少きは畫名の殊に烜灼たるが爲のみ、此の卷の詩、固より佳にして、書は更に妙なり、高韻逸致、畫と毫も軒輊無きを覺ゆ。

唐寅漫興詩卷

刻入敬一堂帖

高九寸三分　長十五尺一寸四分　紙　本

此の卷は吳越所見書畫錄に載錄し又敬一堂帖に刻せる劇迹なり、行書、七律詩凡て十首「蘇臺唐寅」と款署せり、印記無し、卷末に嘉靖甲申、景暘の跋あり、之に據れば此の卷は伯虎の絕筆なるが如し、又陸時化の一跋あり、云はく

六如の書は其の結構用筆、趙松雪と皆同じ、少しく異なるは、松雪は含蓄し、六如は發露せり、其の道亦想ふて知るべきものあり、松雪は享くる所、人間の榮祿を極め、又俶配賢子を得たり、其の出筆の雍和なるは宜なり、六如は裏然擧首となりしが折挫に遭ひて身を進むべき無く、而して家又酷だ貧しく書畫に衣食せり、故に不平の氣筆尖より在在流露せり、此の卷、松雪に較ぶるに過ぐることありとも及はざる無し、所謂不平は獨り之を書に見るのみならず、其の詩を誦しても悲歌感慨交も集る。

詩十首中、三首を左に載錄す。

十載鉛華夢一場。都將心事付滄浪。內園歌舞黃金盡。南國飄零白髮長。滿榻亂書塵漠漠。數聲羌笛月蒼蒼。不才贏得腰堪把。病對緋桃檢藥方。

悵悵暗數少時年。陳跡關心自可憐。杜曲梨花盃上雪。灞陵芳草夢中煙。前程兩袖黃金淚。公案三生白骨禪。老後思量應不悔。衲衣乞食院門前。

平康巷陌倦遊人。狼藉桃花中酒身。短夢風煙千里蝶。多情絃索一牀塵。黃金誰買長門賦。黛筆難描滿額顰。惟有所歡知此意。共燒高燭送殘春。

懷煙閣陸氏珍藏書畫印等藏印凡て四あり、前隔水に陸時化手書の題籤を嵌存す。

仇英仙山圖立軸

陸師道書仙山行

高一尺六寸六分　闊一尺一寸五分　紙　本

白描の仙山樓閣圖なり。右方下に小楷書にて「實父仇英製」と款署し十州の葫蘆印を鈐せり、上方に陸師道の小楷書仙山行あり、左に錄す。

仙山行

懸崖排空萬丈餘。瑤宮貝闕聳淸虛。草木叢茂元氣舒。菡萏浮動金芙蕖。鬼斧鑿裂蒼崎嶇。要令呑吐如蟾蜍。浩浩大海東南瀦。洪濤蕩激痕未除。白乳滴結色雪如。靑鳥飛集啄瓊琚。

滿洞雲烟誰所噓。冷翠撲人濕衣裾。直疑竅通崑崙墟。十二玉樓神所居。日華月華佩璠璵。
翻然而下騎鯨魚。平生嗜山如狼狙。南窮衡嶽北醫閭。手攀古藤倚栟櫚。仙風吹髻寒蕭疎。
日之夕矣吾歸歟。欲歸更爲山躊躇。
群峯嶂崒爭清妍。寒松謖謖相綿聯。人間黃塵千萬丈。一點不到仙巖邊。雲充掩映山氣爽。
浮烟積翠何葱芊。奇花異卉抱山麓。猿鶴不驚雀不喧。朱檐丹桷渺空際。恍疑無路堪攀緣。
煑茗有泉飯有秫。閒把一卷長生篇。從來眞境不易到。結想還借丹青傳。

嘉靖十四年乙未夏五月題十洲仙史畫　　五湖漫士陸師道

首尾凡て十六行、一筆弛緩なく宛も文衡山の小楷を見るが如し、款下に陸氏子傳の一方印を鈐せり。子傳は文門の高足なり。明史に稱すらく「徵明の四絕は、趙孟頫に減ぜず。而して師道は之を並せ傳へ其の風尙亦相似たり」と、幅の右方上に檇李、墨林子、平生心賞の三印と下に松雲珍藏の一印、左方下に子京、項元汴印の二印あり。

石渠寶笈に養心殿貯藏の仇英畫、陸師道題雲溪仙館圖を載錄せり云はく「明仇英雲溪仙館圖陸師道書仙山賦一軸宋箋本、著色畫、款に云はく「仇英實父製」と。下に仇實父氏、仇英之印の二印あり、上方に陸師道の楷書仙山賦あり、款識して「嘉靖二十七年冬十月廿又一日陸師道書」と云ひ、前に仙山賦の三字を署せり、卽ち仇畫陸題に於いては畧此の軸と相似たれども款署圖章皆異なり、且つ彼れは著色にして此は白描なり、彼れに在りては陸題は嘉靖二十七年にして此は嘉靖十四年なり。乃ち此の幅は石渠の秘藏と時を異にして作を同うすと謂ふべし。近刊の盛京故宮書畫錄亦仇英の仙山樓閣圖軸を載錄して云はく「素箋本著色畫立軸、款識は仇英實父製、下に十州、仇英之印の兩印あり（中畧）詩塘の烏絲欄に陸師道の楷書仙山賦一首あり」と。而して仙山賦を讀めば無慮七百字の長篇にして末尾に「嘉靖庚戌春二月既望五湖陸師道書」と款署せり、庚戌は嘉靖二十九年なり、卽ち是亦別本なるを知る。

畫鑒に云はく「古人畫を作るに得意のものあれば多再之を作れり。李成の寒林、范寬の雪山、王詵の烟江疊嶂の類枚擧すべからず」と。乃ち仙山樓閣も亦實父得意の作たるを想ふべし。仙山樓閣は由來尤も俗惡に陷り易し、之を描して神韻縹渺たるは高手にあらずんば能はざるなり。世の工細濃豔の界畫を以て誤りて仇畫の眞面目と爲す者は宜しく此の軸に就いて實父の本領を窺ふべきなり。

仇英梅花公主圖立軸

高四尺三寸六分　闊一尺五寸三分　絹本

著色畫。老梅二三株の下に仕女侍童を畫けり、筆意蕭疎、殊に樹石の描法は平常見る所の仇畫と同じからず。蓋し北宗より脫胎して、新に機軸を出せるものにして、亦これ仇畫の一格なり、其の淸楚秀勁なるは十州にあらずんば、到り易からず。「實父仇英製」と款署し十州の葫蘆印を鈐せり、右方上に皇六子和碩恭親王の方印あり。

方蘭士の山靜居畫論に云はく「曾て仇實父の畫ける孤山、高士及び移竹、煎茶、臥雪の諸畫を見たりき、樹石人物、皆蕭疎簡遠の筆なり。之を六如、衡山の閒に置くとも幾ど辨ずべきなし、何ぞ常に專ら雕繢のみを事とせんや、世惟見る所少きのみ」と。此の梅花公主圖も亦其の一類にして、簡勁の筆に士氣を寓せり。卽ち文唐と幷鑣する所以なり。

仇英維摩說法圖立軸

高四尺四寸八分　闊一尺四寸九分　紙本

著色畫。維摩法を說く處、座を繞れる人畜數十、男あり、女あり、僧衣の者あり、甲冑の者あり。象あり、獅あり。丘陵樹木其の外景を點綴し、上に天女あり、彩雲に乘じて散花の狀を爲せり。

屋宇は界畫を用ゐ人畜は龍眠の法を倣へり。筆致高雅、傳彩古澹、巷閒流傳の仇畫と稱するが如き俗臭厭ふべき所絕えて無し。此の幅無款なるも前人定めて仇英の眞蹟と爲せり。蓋し善鑑と云ふべし、左方下に梁樞私印、安波珍賞、家藏寶玩、夏時正印、見穎監古の五印あり。

仇英綠蔭品茶圖立軸

高三尺七寸　闊一尺七寸　絹本

著色畫なり。湖岸の平岡石坡に高樹三株あり、樹下に茶賈三人茶を品するの狀を寫せり、土坡樹木の描法、皆古法より出て、人物の用筆、細なること繭絲牛毛の如く、勁なること銅筋鐵骨の如し、左方樹幹の上に小楷書にて「實父仇英製」と款し、十州の葫蘆印を鈐せり、款字極めて佳なり、下角に陽安藏畫の一印あり。

十州の畫は細緻を以て本色とし、其の一卷一軸も究年累月の功を積むにあらずんば作す能はざるもの多し、十州享年五十に滿たず、其の一生畫ける所計るべきのみ、明の四大家中、仇畫の最も獲難きは之が爲なり、而して絹本設色のものに特に贋本多く、眞蹟に逢ふは極めて稀なり、余十數年來、百方訪求して獲る處僅に一二に過ぎず、乙丑の晩秋、北京に遊び、某君

の齋頭に於いて此の幅を見たり、世間流傳する所の濃豔俗惡の界畫とは、全く其の選を異にし、風格筆致超凡絶俗正に仇畫の眞蹟なり、因りて重價を出して購ひ歸れり、東瀛是に依りて又仇蹟の精品一を加へたり。

仇英理琴圖文徵明琴賦合卷

高九寸三分　長三尺八寸九分　紙本

墨畫。一高士琴を膝にして榻上に坐し、榻を繞りて瓶花盆石、壺盂卷册羅列し、前に一白鶴を寫せり、都て白描を用ゐ、巧緻の閒に神韻を藏す、款に云はく「實父仇英製」と實父の長方印十州の胡蘆印を鈐せり、卷前別幅に文徵明の隷書晉の嵇叔夜の琴賦あり、烏絲格、本文五十行、款識五行、款識に云はく「嘉靖戊子三月廿有六日文徵明識」と、下に徵明の印、前に停雲生、玉磬山房の印を鈐せり、衡山五十九歲の作なり、卷の前後に天籟閣、項元汴印、墨林秘玩、項子京家珍藏、子京、子孫永昌、子京所藏、項墨林父秘笈之印の藏印八あり、引首に林佶の隷書「文仇合璧眞蹟」の六字あり、拖尾に高江村の二跋あり、前跋に云はく「仇實父、海內に盛名あり、天姿奇妙にして筆法は能く唐宋諸大家の長を並せたり、余眞蹟を購訪して百に未だ一を得ず、康熙二十七年春二月、適ま武林の行あり、深く檇李の項氏を慕へり、當時墨林先生博雅好古にして、秘藏せし法書名畫甚だ富めり、特に過訪して觀むことを求む、主人用之先生極めて雅愛なり、余が好古の甚しきを知り、特に唐宋元明の諸名蹟を出して示さる、展玩竟日、喜んで自ら勝へず、內に仇英の理琴圖卷あり、前に文衡山先生の隷書琴賦あり、精妙絶倫、合して雙美とせり、展閲の閒、人をして手を釋くに忍びざらしむ、用之先生余が心切に、好むこと甚しきを知り、慨然として卽ち此の卷を以て贈らる、余欣喜萬狀、之を懷にして歸る」云云思ふに平生見る所の仇畫は、概ね金碧細緻且つ絹本にして、十の八九は贋本なり、其の至巧、目を驚かすと雖も遽に容して眞蹟と爲す能はざるもの多し、惟り紙本白描のものに至りては贋鼎太だしく多からず、蓋し白描は神韻を得ること難く、臨摹の馬脚を露はし易きを以てなり、此の理琴圖は描法高雅を極め、全く畫師の習氣を脫盡せり、前人仇英を評して云はく「實父は章句の儒にあらず、然れども鑒古頗る多く、又日に衡山諸老と講習せり、荀子の所謂る染人は丹靑に湛るものなり」と、蓋し知言と云ふべし。

衡山の琴賦は亦精妙絶倫、人をして評するに言無からしむ、吳俊卿は拖尾に跋をして「待詔隷古金錯刀、用筆眞有漢魏意」の句あり、當れりと云ふべし。

仇英四時宮樂圖卷

成親王舊藏
成親王題詩二十二首

高九寸九分　長十五尺四寸　絹本

著色畫。後宮の仕女行樂の圖なり、宮女侍童を寫せる凡て一百四十七、閒ふるに翎毛を以てし、配するに禁苑四時の景を以てせり、細巧絶倫、傳色沈厚、洵に仇畫の眞蹟なり。「仇英實父製」と款し十州、仇英之印の二印を鈐せり、藏印十あり、拖尾に成親王の題詩二十二首あり、永瑆之印、皇十一子、詒晉齋の三印を鈐せり。

此の卷は成親王の舊藏に係り、後、恭親王に歸し、清朝覆滅後、出でゝ民閒に流傳せり、成邸の木匣今尚存す。

仇英の贋本は工細濃彩のものに於いて尤も多し、葢し工細は贋摹に容易なるが故なり、但贋本は筆意凝滯して神韻足らず、傳彩烘灼たれども古厚を缺く、鑑者は一望して辨ずべきのみ。

杜陵内史宮人調鸚圖立軸

高三尺四寸四分　闊二尺九分　絹本

著色畫。一宮妃、屏障を後にして几に倚り、侍女、團扇を搴けて傍に立つ、小卓上に一鸚鵡あり、宮女三人、環視調教の狀を爲し、彫欄修竹、文石雜卉等すべて後宮の景を寫せり、左方下に小楷書を以て「吳門仇氏畫」と款し杜陵内史の印を鈐せり、又斧藻含章の一印あり。

内史は仇英の女にして、其の畫は古來聲價甚だ重きも流轉多からず、今此の圖を觀るに用筆細緻にして而も高古、傅彩濃豔にして而も沈厚、一點卑俗の態無し、款を掩うて之を睹ば全くこれ乃父實父の作と爲さむ、洵に知る名聲は以無くして來らざることを。

杜陵内史白描仕女册

高八寸六分　闊九寸三分　紙本　計四幀

内史は尤も白描を能くし、その筆意乃父十州に髣髴たり、此の册は原八幅又は十二幅なりしが如し、散佚して今僅に四幅を存す、内史の眞蹟は傳世極めて尠し、乃ち此の數幅も亦これ麟角鳳毛なり、珍重せざるべからず。

第一幅　樹下愁思の圖なり、款に「杜陵内史」と署せり。

第二幅　筆を手にして詩を思ふの圖なり、款に「吳門仇氏」と署せり。

第三幅　桐蔭彈琴の圖なり、「杜陵内史畫」と款署せり。

第四幅　机に對して碁を玩ぶ圖なり、款識に云はく「隆慶元年七月、杜陵内史寫」と。款字は正楷、端麗見るべし、毎幅款下に杜陵内史の長方印を鈐せり。

張浦山庚は論じて曰はく「古人仕女を畫くに立體或は坐し、或は行き、或は立ち、或は臥す、皆質樸にして神韻自然嫵媚なり、今の畫者、務めて新豔を求め、妄に彎環罄折の態を極むるは、何ぞ梨園子弟の場に登り劇を演ずると、倡女の人に媚ぶるに異ならん、直ちに人をして之を見て嘔せんと欲せしむ、昔し桓溫、李勢の妹を納れて妾と爲し、諸を齋中に置きぬ、其の妻、刃を操りて之を襲へり、李、情辭悽惋たり、妻、刃を釋てて曰はく、我すら見て猶憐む、何ぞ況や老奴をやと、夫れ李は危急驚懼の時に當りて、猶妬婦をして妬を易へて憐と爲さしめき、卽ち此を以て思ふに、風韻の生ずる所は固に嬌を生じ態を作すに在らざるなり」と、今内史の此の册の仕女を見、而して近年畫手の畫く所に想到すれば、浦山の言は極めて味ふべきを覺ゆ。

王陽明家書卷

鄒守益跋

第一幅　高八寸七分餘　長三尺七寸四分　紙本

第二幅　高八寸六分餘　長三尺五寸

第三幅　高八寸六分餘　長三尺一寸五分

第四幅　高八寸五分　長三尺一寸九分

第五幅　高八寸三分　長三尺八寸

鄒守益跋　高九寸六分　長二尺二寸六分

正德十一年、王陽明齡四十五歲、南贛の巡撫を命ぜられて贛州に赴く途次、臨江舟中より嗣子正憲に寄せたる家書なり、凡て五通、行草書あり、行楷書あり、各〻流麗の中に法度を存して一字一筆も苟もせざる所に古人用意の深きを見る、第四幅に陽明山人の長方印、第五幅に新建伯の大方印を鈐せり、手札の全文は長きに過ぐれば爰に之を錄せず、唯其の第一幅を揭ぐ

卽日舟已過巖灘、足瘡尙未愈、然亦漸輕減矣、家中事凡百與魏廷豹相計議而行、讀書敦行、是所至嘱、内外之防、須嚴門禁、一應賓客來往、及諸僮僕出入、悉依所留告示、不得少有更改、四官尤要戒飲博、專心理家事、保一謹實可托、不得聽人哄誘有所改制、至前途更

有書報也、九月廿三日嚴州舟次、父字付正憲收

老奶奶及二老奶奶處、可多多拜上說一路平安

後別幅に鄒守益の一跋あり、全文左の如し

先師陽明夫子家書此卷、嗣子正憲仲蕭甫什襲藏之、益鄒天眞、奠蘭亭、獲觀焉、喜曰是能授簡不忘矣、書中讀書敦行、日進高明、鈐束下人、謹守禮法、及切磋道義、請益求教、互相夾持、接引來學、眞是一字一藥、至吾平日講學、只是致良知三字、仁人心也、良知之誠愛怛惻處、便是仁、無誠愛惻怛、亦無良知、可致是心、繼志述事、望吾仲肅也、仲肅日孳孳焉、進而書紳、進而服膺、則大慰吾黨愛助之懷、而夫子於昭之靈、寔寵嘉之

嘉靖庚申孟夏廿八日東廓鄒守益書

東廓山人、謙之印、大司成之章の三印を鈐せり、時款に依れば鄒の此の跋は家書に後るゝこと四十五年、陽明歿後三十一年なり、鄒守益は陽明門下の高足にして一代の鴻儒たりしは之を說くの要無し、其の墨跡は極めて稀にして極めて貴し、今師弟の遺墨を一卷に併收す、亦翰墨の多福と云ふべし。

首幅に張崟之印、每接縫に夕庵の印あり、卽ち淸の張夕庵の舊藏たりしを知る。

王陽明の家書は著錄に散見せるもの二三に止らず、中に張維屏の一跋あるものあり、跋の一節に曰はく「先生自ら言ふ、始め古帖を摹し、正に字形を得たり、後筆を擧ぐるも輕しく紙に落さずと、今此の蹟を見るに、健氣の中に於いて每に波折の氣饒し、大賢字を作ること甚だ敬み、尋常の簡牘だも亦苟もせざるを知る」と、此の卷に見る所と正に脗合す。

陳淳鶩湖棲遲圖立軸

高四尺六寸七分　闊二尺二寸七分　紙　本

淡著色畫。款題に云はく

棲遲山水曲。佳興四時便。但得令心遠。何須華嶽連。

庚寅冬仲十日、訪小山先生於鶩湖之曲、淹留信宿、因作此以志歲月云、白陽山人陳淳

陳氏道復、陳淳之印の二印を鈐せり、藏印六あり。庚寅は嘉靖九年にして、此の軸は道復四十九歲の作なり。

道復の山水は、襄陽父子の法を倣ひ、造詣極めて深し、但花卉を善くせしが爲に、山水は遂に其の掩ふ所となれり、而して其の流傳亦多からず。黃學曾は嘗て其の妙所を論じて云はく「白

陽陳先生は用筆瀟灑、覽て汗漫統無きが如くにして而も波瀾緒あり」と。今此の軸を見るに山巒石坡、皆皴を用ゐず、水墨渲染して成る。正にこれ米家の法なり。而も曚曈の山、無根の樹を畫けるにあらず。所謂汗漫統無きが如くにして而も波瀾緒ありの一語は洵に的中せるを覺ゆ。二米の間に縱横して其の風骨神韻を得たるものにあらずんば到る能はざるなり。道復は常に文衡山を師と稱したれども、其の筆墨は必ずしも文門の蹊徑に依らざりしが如し。王弇州云はく「家弟嘗て待詔に問ひき、道復は曾て翁に從ひて書畫を學びたりやと、待詔微笑して曰はく我は道復が擧業の師のみ、渠の書畫は自ら門逕あり、吾徒にあらざるなり」と。試みに今傳はる所の兩家の書畫を對照するに、衡山の此の言は必ずしも一場の漫語にあらざりしを知る。

陳淳溪山雨後圖卷　附詩翰

高八寸七分　長五尺五寸三分　紙本

淡著色畫。雲山糢糊、綠樹蒼莽、雨後溪山の景、寫し得て妙を極む、米法を倣ひ己の意を以て之を行れり。草書にて「道復」と款署し復甫氏、陳氏道復の二印を鈐せり、拖尾に吳俊卿の詩跋あり。

道復は文衡山の門に出づ、然れども其の山水は概ね二米を宗とし、文家細緻の手法を用ゐたるは甚だ寡し、文休承は道復の樂志圖に跋して云はく「畫は草草なりと雖も而も天眞爛漫、方方壺、張復陽と勝を爭ふ、吾は猶其の筆墨の稍繁なるを恨む、蓋し道復の畫は愈簡なれば愈妙なればなり」と。王弇州また云はく「祝枝山の書法と陳白陽の畫法は筆墨中の飛將軍なり」と。今この軸を見るに淋漓跌宕、古人に離合して別に法門を開けり、前人の評隲は頗る眞を穿てるを覺ゆ。

卷後に草書詩翰を附裝せり、五言律三首、款に「道復稿」とありて陳氏道復の印を鈐せり、書は點畫狼藉、姿態横生し、詩亦彫琢を藉からずして天趣流露せり。左に其の一を錄す。

短棹朝來發。行行逐去流。碧雲偏媚晚。黃葉已呈秋。野村縣新旆。危城倚故樓。到門塵土積。呼酒送閒愁。

錢功甫は道復の詩を評して「先生の詩は瀟散閑雅、恬澹自然なり「梧桐半階月。楊柳一簾風。流水去無住。停雲意自閑。晚凉生竹塢。新水溢花渠。」の如き、咸く妙境に臻る」といへり、此の卷の詩を讀むに洵に此の評の如し。

陳淳採蓮曲書卷

高一尺七分　長十五尺九寸八分　紙　本

大草書。の採蓮曲を書す、款識に云はく「癸卯春日、書王子安作于浩歌亭。道復識」と。白陽山人、復生印の二印を鈐せり、癸卯は嘉靖二十二年にして卽ち道復の歿せし年なり、此の卷恐らくは其の絶筆ならんか。

文衡山の門下多士濟濟たりと雖も、皆衡山の規矩の內に跼蹐せるに過ぎず、惟白陽に至りては師法に拘拘たらずして別に蹊徑を開けり、初め松雪より入手し、後大令に瓣香せり、白陽は衡山より少きこと僅に十三歲、師弟と云はんよりは寧ろ交友たりき、是其の然るを致せる所以ならんか。此の卷縱橫排奡、轉折波拓の變を極めたり、之を衡山の秀整に較ぶれば、恰も敎外別傳の觀あり。王弇州は衡山を以て唐の李將軍に比し、白陽を以て薛將軍に比せり、云はく「唐の文皇曰はく當今の名將は惟李勣と薛萬徹とのみ、勣は大に勝たざれども、亦大に敗れず、萬徹は大に勝たずんば大に敗ると、以て文太史及び道復に語らば當に一將印を領取すべき也」と。その對照、頗る妙なるを覺ゆ。

陳淳書畫前赤壁賦卷

畫　高九寸　長四尺二寸　絹　本

賦　高九寸　長四尺一分　紙　本

道復曾て人の爲に赤壁賦を書しき、數年の後、客あり之を携へ到り、其の圖を寫さんことを乞へり、道復誰の爲に此の賦を書せしかを記憶せず、又曾て赤壁に遊びしことも無かりしが請に任せ圖を作りて之を與へき。此の卷卽ち是なり。畫は淡著色にして樹石は全く道復平生の手法を用ゐて、秋江蕭疎の氣、縑素に橫溢せり、款題して云はく

客有携前赤壁賦來田舍、不知余爲誰人書、乃欲補圖、余於赤壁、未嘗識面、烏能圖之、客强不已、因勉執筆、圖旣玩之、不過江中片石耳、而舟中之人、將謂是坡公與客也、夢中說夢、寧不可笑耶。

嘉靖丁酉孟秋二十日、白陽山人陳道復書

白陽山人、復甫氏の二印を鈐せり。

書は草書、烏絲欄、三十九行、「道復記」と款し復父氏の一印を鈐せり、昔人道復の書を評して云はく「豪勁にして姿態あれども第古法なし、之を散僧と謂はん、亦祇た參禪すべきのみ」と。此の卷を閲るに文衡山の遒美、祝枝山の淳古は之を見る能はざれども、欹側潦草の中に佳趣あり、自ら是大家の筆墨なり、その古法の有無のごときは必ずしも問ふを須ゐざるなり。

陳淳江山煙雨圖卷

高八寸七分　長九尺　紙本

淡著色畫。起首には汪洋たる大江、連綿たる遠山、中段には峯巒重疊、煙雨溟濛の間に樓閣伽藍隱現し、末段には低阜平林を寫し以て圖を終はり。「嘉靖壬寅春日道復作」と款識し、白陽山人、陳氏道復の二印を鈐せり、道復六十五歳の作なり。卷末に老蔗の一印あり、清の董誥の印記ならむ。

彭孔嘉曰はく「昔し米南宮の女、吳中の大姚村の某氏に嫁せり、故に敷文、吳に過ぐる毎に必ず往いて妹を視き、嘗て雲山卷を作りて其の家に留めたり。こゝに四百年、先達中丞陳公は大姚の人なり、乃ち京に於いて之を得、甚だ以て奇と爲せり、西涯、匏庵、石田俱に題咏あり。白陽先生は卽ち中丞の孫なり、幼にして篤く之を好み、日に就て臨搨し、其の眞趣逸思を領せり、故に作る所多くは煙巒雲樹、約略點染せるのみ」と。洵に此の言の如し道復の眞蹟、余年來觸目する所は皆米法に脫胎して其の風神を領略せざるはなし、此の卷も亦其の一なり、王西室が道復の畫を評して「陳白陽の作畫は天趣多くして境界少し、或は殘山剩水、或は遠岫疎林、或は雲容雨態、點染標致して塵俗を脫去し自ら畦徑を出だせり、蓋し意を得て象を忘るゝものなり」と言へるも亦是なり。

張寰倭寇詩卷

高一尺六分　長十六尺七寸　紙本

楷書。自作の詩、各體十九首。款識に云はく「嘉靖癸丑仲夏既望、石川居士張寰書于東郭之兀然亭」と、張氏允淸、三一居士の二印を鈐せり。

張寰は嘉靖年間に詩書の名高かりき、癸丑は嘉靖三十二年なり。詩は悉く倭寇の事に關す。當時官民其の猖獗なるに苦み、之を畏れ之を憎める狀、辭句の間に躍如たり。是れ特に此の卷は邦人の興趣を惹く所なり。今其の數首を錄す

中丞秉鉞下三江。憲使提兵鎭海邦。小醜漫勞驅大帥。島夷膽落已心降。」
聖代于今重武科。孫吳將略定誰多。忽驚殘虜朝傳檄。晝役疲民夜枕戈。」
閭閻日困小民窮。十室探囊九室空。忍逐孱夫親矢石。難將畫餅策奇功。」
鳴刀擊柝爾徒勤。日給升糧念爾貧。老若豈堪臨陣壘。班師浪擬及三旬。」
桓桓單騎騁賢勞。伏鉞星馳逐野猱。三戰華橋鋒益銳。羣兇駢首望風逃。」
愛爾芳隣在。何妨我數來。扁舟隨野泊。三徑逐江開。春雨長敎足。秋花滿意栽。島夷祛
醜虜。人境擬仙臺。

盧璘賀胡宗憲五十壽詩卷

高八寸六分　長十三尺七寸五分　絹　本

行書。五言古詩四十韻並に序、凡て九十二行、款識に云はく「時嘉靖歲辛酉秋九月二十六日、
治下致仕運使餘姚盧璘頓首謹書」と連城之章、乙未進士の二印を鈐せり、辛酉は嘉靖四十年
なり。詩は胡宗憲の平定倭寇の功を謳歌せしものにして「殲魁得鯨鯢、獲醜窮犬羊、妖氛迅掃
蕩、東海無波揚」等の句あり、誇張の作辭、時に失笑を禁ずる能はざるものあれども、而も一

時の小康を得て歡喜せること斯の如きは、當時、いかに倭寇の猖獗にして、上下窘窮せしか
を想見すべし、卽ち張寰の詩卷と共に倭寇史上の一資料たらんか。

謝時臣山堂獻壽圖立軸

高六尺八寸　闊三尺一寸三分　絹　本

淡著色畫。款に云はく「奠雁謝時臣寫」と下に二印あり、印文模糊として辨ずべからず。
謝樗仙は固より一畫史にあらず、儒を以て立ち詩詞文藻に長ぜり、惜むべし畫名に掩はれ人
その儒たるを知らず。其の畫は北宗に屬すれど、而も北宗俗惡の習に染まず、會心の作には
大に見るべきものあり。又人物を描くに巧なりしは、陳道復旣に之を言へり。此の軸は縑素
稍黯けれども精采猶減ぜず、樗仙の佳品なり。
四友齋畫論に云はく「蘇州に謝時臣といふ者あり、樗仙と號し、亦畫を善くし頗る膽氣あり
て、能く大幅を作れり、然れども筆墨皆濁り俗品なり、杭州の三司、作畫を請ひ去り、酬ゆる
に重價を以てせりと是亦逐臭の夫のみ」といへり、然れども是南宗信者の僻論のみ、以て樗
仙を輕重するに足らざるなり。

謝時臣黃鶴煙波圖巨幅

高九尺六寸五分　闊三尺三寸三分　紙本

墨畫。黃鶴樓の圖なり、樓閣舟楫、煙雲波浪、江天空濶の意ならざる無く、人物樹葉に微しく丹赭を加へたり、近巒は山鬼の如く、遙峯は幻影の如し、筆力雄勁、氣魄淋漓たり。款を掩うて之を見れば正に想ふべし、沈石田の大作なりと、隷書を以て「黃鶴煙波」と署し、草書を以て「謝時臣作」と款し樗仙翁の印を鈐せり。

傳へ云ふ、樗仙の山水は馬遠夏圭を師法とし戴文進、吳小僊を融合して別に一家を成せりと。近人陸廉夫恢は云はく「北宗も亦數派に分る、馬遠は堅凝老到にして人屋皆工なり、夏圭は凌厲開拓、尤も遠景に妙なり、樗仙は兩家を兼採し稍之を渾融せり、これ能く古を學べるものなり、藍田叔に比すれば、更に濶大純正なるを覺ゆ」と。樗仙の作、常に見る所のものは、多くは浙派の手法に屬す、乃ち南宗派の詆訾を招ける所以なり。然れども必ずしも浙派の蹊徑にのみ跼蹐し、獷悍の一途を固守せるにあらず。古緣萃錄に樗仙の「倣石田山水軸」を載錄せり其の畫法は全く南宗に依倣せるもの、如し。此の軸も亦樹木山巒、梅道人を倣ひて一點も北宗の臭味なく、氣韻風格、超凡絕倫なり。誰か樗仙を目して馬夏の糟粕を嘗むる者と爲さんや、古人又樗仙が水を寫すに工なりしを稱して「江潮湖海種種妙なり」と云へり、此の軸を見て特に其の然るを覺ゆ。

樗仙は其の友少溪の爲に山水を畫き、題して云はく「嘉靖二十六載丁未、吳門六十老人謝時臣、遠遊荆楚、登太和、次大別、梯黃鶴樓、涉匡廬、下楊子江、舟中推篷取興、與谿山寫眞、積成長卷計三幅、遙寄嘉禾少谿草堂、少谿賞識名家、此筆得所歸矣」と。卽ち樗仙は天下の山川を跋涉し、造化を師としてこれを筆墨に流露せしを知るべし。彼の足迹十里を出でずして、粉本に依りて畫を作る者の比にあらず。故に其の興會一たび至るや、畫史の蹊徑に拘拘たらず、南北を綜合して之を筆端に融和し、天趣功力、兩全を得、これ其の會心の作の殆ど石田と覇を爭ふ所以なり。吾が邦に傳ふる所の樗仙の畫は短卷小幀多く、未だ以て其の魄力を見るに足らず。

王寵登上方寺詩立軸

高三尺一寸三分　闊一尺三寸　紙本

明の鑑家何元朗良俊曰はく「衡山の後、書法は當に王雅宜を以て第一と爲すべし。蓋し其の書は大令に本づき、兼ぬるに人品高曠なるを以てす、故に神韻超逸、迥に諸人の上に出づ」と、此の軸は草書、五行、七言律詩一首、詩に曰はく

昏黑馮陵到上頭。諸天風雨颯高秋。千峰楚粤微茫見。百瀆東南浩蕩流。
寓世形骸須縱酒。盪胸雲霧幾登樓。滯居不爲明時恥。浪迹將騎黃鵠遊。

款に「暮雨登上方寺作、王寵」とあり、下に王履吉印、雅宜山人韡韡齋の三印、右方上に大雅堂の一印を鈐せり。子京父印、項墨林鑑賞章、項元汴印、墨林秘玩、項子京家珍藏の五印及び、蓉峰劉恕家藏、閔林漢如家藏等の藏印あり。雅宜山人の書には卷册の類多く、立軸は極めて罕なり、此の軸の如きは尤も貴重すべきなり。

來禽館集に謂はく「王履吉の書はもと獻之より出でて疏宕秀媚、亭亭として天拔せり、卽ち祝の奇崛、文の和雅すら尙雁行を議し難し、矧んや餘子をや」と。今この軸を觀るに此の評は必ずしも過情の美にあらざるを覺ゆ。

王寵楷書詩帖卷

高六寸五分　長七尺一寸五分　紙本

小楷書。詩十四首、左の如し。

五噫歌　七言古詩五首
登玄基　五言長篇一首
三寶詩　五言長篇三首
秋夜石湖泛月　五言律一首
竹塘寺訪大林上人次韵　五言律一首
觀沈香井　五言律一首
泛太湖　五言律二首

卷末に款識して云はく「丙戌夏五、東溪過訪山齋、屬余楷書、漫錄舊作、一咲忘其醜拙、年華易去、迄無進步、良可愧也、雅宜山人王寵」と、卷首に大雅堂の一印、下に王寵私印、履吉之印の二印を鈐せり。履吉は嘉靖十二年齡四十歲にて歿せり、此の詩を書せる丙戌は嘉靖五年にして履吉三十三歲なり、王夢樓文治云はく「有明一代、楷法を善くせし者は董文敏の外は祝枝山、王雅宜のみ、二沈學士の未だ俗氣を脫せざりしは論無く、卽ち文待詔亦板滯にして筆趣

少し、古人を去ること尚遠し」と、今此の卷の楷法を見るに、超妙絶倫にして、秀整は衡山に遜れども古意は却て勝れり、夢樓の評、果して虛妄にあらざるを知る。

藝苑巵言には履吉の詩を訾議して「鄉の少年久しく都會に遊べるが如し、風流詳雅なれども而も盡くは本來の面目を脫せず、又揚州の大宴に似たり、鮭珍水陸なりと雖も而も時に宿味あり」と云へり。是れ未だ至論と云ふべからず、履吉は齡五十に滿たずして蚤世せり、其の詩の時に蹊徑を滅盡せざるものあるは亦自然の數にして、之を以て其の全豹を斷ずべきにあらず、明詩別裁には「爾の時吳中の詩格は履吉を以て最と爲す」と云ひ、胥臺集には「山人の詩は才力雄濶、辭篇麗贍にして輕靡を去りて沈着に就き、鋪綴を尙びて陶鎔を略す、白雀の諸篇は興寄冲玄、思調淸逸遂に陶謝の堂を窺ひ、幾んど王孟の室に入る」と稱し。四友齋叢說には「雅宜の詩は淸警絶倫にして一點塵俗の氣無し、所謂天上の謫仙人なり」と言へり。此の卷の詩を讀む者、其の風骨格調を味はゝ是等諸評の必ずしも過譽にあらざるを知るべし。

王寵書古文辭册

紙本　計十幅

一幅　高八寸九分　闊六寸八分

八幅　高八寸九分　闊六寸五分

烏絲格、小楷書。古詞賦十篇、其の目左の如し。

蓬萊宮賦　長樂宮賦　長楊宮賦

甘泉宮賦　未央宮記　漢宮詞　六首

阿房宮賦　九成宮醴泉銘　連昌宮辭　吳宮萬玉賦

款は每幅同じからず、寵、王寵、雅宜子王寵又は雅宜山人王寵など署して、王寵私印、履吉之印の二印及び大雅堂の方印を鈐せり、惟九成宮醴泉銘には款を署せず、王寵私印、大雅堂の二印を鈐し、末幅吳宮萬玉賦の後に「嘉靖丙戌夏五月望、雅宜山人王寵書」と款識せり、卽ち此の册は山人三十三歲の作なり。

履吉の書は法を鍾王に取り、小楷に於いて尤も其の絶技を見る。年齒は文衡山より若きこと二十七歲、而も履吉の書名は當時衡山と相並びて天下に洽かりき。今此の册を見て名下果して虛士無きを知る。履吉は享年僅に四十にして卒せり。而して傳來の書は二十五六歲より三十八九歲前後のものを多しとす、今著錄に據りて其の二三を擧ぐれば石渠寶笈の「莊子內七篇」は二十三歲、古緣萃錄の「摹晉唐小楷册」は三十一歲、「小楷孫武子十三篇册」は三十三歲、

「西苑諸詩卷」は三十七歳、「小楷稽叔夜文册」は三十九歳にして過雲樓書畫記の「遊包山詩卷」は三十四歳の書なり、年齒未だ而立ならずして既に卓然たる大家たりき。その力學の致す所なるは論無しと雖もまた天資の超凡なるにあらざれば竟に斯の如くなる能はざるべし。

毎幅玖珊審定金石書畫之印あり、卽ち朱九丹の舊藏なり。

王寵草行書詩帖卷

高八寸　長七尺八寸　紙本

烏絲欄、草行書六十九行。自作の詩四首を錄せり、その詩題に曰く石湖秋汎、贈家兄履約應召、石頭城、湖上作是れ也、前二首は五言長篇、後二首は五言律なり、款識に云はく「拙作、書呈毅如尊兄先生求正、雅宜山人王寵頓首稿」と、下に王履吉印、雅宜山人の二印、卷首に大雅堂の一印を鈐せり、藏印七あり。拖尾に張塤、吳平齋の各一跋、翁覃溪の二跋あり、覃溪は云はく「此に文太史と同じく湖に汎ぶと云へり、則ち是れ衡山歸田の日たる嘉靖丁亥以後の作なり」と。卽ち此の卷は山人三十四歳以後の作なるべし、紙色潔淨、墨光漆の如し。

甫田集に謂ふ「王君は風儀玉立、舉止軒揭、書を石湖の上に讀み、或は時に長林豐草の間に偃息し、醺を含みて詩を賦し、席に倚りて歌へり、邈然として千載の思あり」と。今この卷の詩書を看るに、洵に清麗夷曠、山人の風丰に接するが如し。

王寵臨麻姑仙壇記册

宋拓小字麻姑仙壇記合裝

臨本　高七寸　闊一尺三寸二分　紙本

拓本　高五寸五分　闊一尺二寸一分

前賢云はく「顏魯公麻姑仙壇記はこれ正に東坡の所謂る小字寬綽にして餘あるものなり、蓋し大令より以下、趙集賢以上、八百年間に唯蕭子雲と顏魯公の二人を容るすべきも、仙壇記の奇古遒逸なるは實に蕭子雲に過ぎたるを覺ゆ」と。此の册は宋拓麻姑仙壇記と王履吉の臨本とを合裝せり、宋拓原本既に甚だ貴し、加ふるに履吉の臨本を以てし、驪珠拱璧、架を同うす、誰か魂飛神往せざらんや。

履吉は壯年數次試に應じて中らず、遂に退きて里に歸り居る所を石湖精舍と名け、精心覃思、書を讀み字を習ふこと二十年。此の閒晉唐の眞蹟法帖を倣寫臨摹し到らざるは無かりきと云ふ。此の麻姑仙壇の臨本も想ふに亦此の時に成りしならんか、精勁古厚殆ど顏魯公の眞

を亂る、洵に小楷の絶詣なり。款を署せず、王寵私印、履吉之印の二印を鈐せり、左方下に張叔未の一印あり即ち張廷濟の藏印なり。

拓本は宋拓にして所謂南城眞本なり、原石はもと江西の南城に在りしが、宋の時亡失せり、隨つて原石拓本は殆ど覓め得べからず。明人の集帖中に見る所のものは皆摹寫翻刻なり。此の拓本は明の邵瓜疇彌の故物にして道光十二年、張叔未廷濟の所藏に歸せり、邵彌之印、僧彌、松隱庵主、青雲直上、健之珍藏、吳趨潘氏十三漢甎硯齋所藏金石圖書の諸印、及び張廷濟、翁大年の題記あり。此の原拓本と履吉の臨本は、邵瓜疇所藏の當時合裝して一冊と爲したるものなるは張叔未の題跋に依りて明なり。冊前に莫友芝の題字、冊尾に張廷濟、翁大年の再跋あり。

陸治梅花立軸

高一尺七寸二分　闊九寸一分　紙本

墨畫。款題に云はく

凍壓瑤臺月影虛。玉妃謫墮夢糢糊。無人可論江南事。小引春風上畫圖。

臨元人王元章墨梅小幅、并錄原句於幀端、辛巳春初、包山陸治臨。

包山子、陸氏叔平の二印を鈐し、左方下に陸生叔平の一印を鈐せり、右方下に櫟園の印あり。曾て周亮工の收藏たりしが如し。

包山の生卒年月は未だ詳ならざりしが、郁逢慶の書畫題跋記に包山の烹茶圖あり、包山の款識に云はく「嘉靖壬子、友人携琴過訪、試雨煎茶、作此、後二十三年早春、復與同試陸羽泉、重題、乃萬曆乙亥三月三日也、而余已八丙七辰矣、書此以紀歲月」と。之を以て推すに包山は弘治九年丙辰の生なり。乃ち此の軸の辛巳は萬曆九年にして包山八十六歳なり。

陸治牡丹立軸

高四尺　闊一尺六分　紙本

著色畫。款題に云はく

檻外雙花暎酒開。隔簾風動影連回。宵欄瞥見殊相訝。海上紅雲捧月來。　陸治作

包山子、陸治叔平の二印を鈐せり、下方に雙清閣書畫章、依園居士、敎忠堂藏、學堂無事の四印あり、衣園居士は清の勵宗萬なり。

弇州續藁に云はく「包山は文祝二先生の門に遊び、其の丹青の學に於ける務めて其の胸中の奇を出たし以て古人と角せり。一時の聲望幾んど文先生と埒しかりき」と。有明一代、花卉を能くせし者を擧ぐれば沈石田、王仲山、孫雪居、陳道復、周之冕の諸家にして、陸包山亦其の一なり。多くは水墨淡彩の寫意畫にして韻致を重んじ、工緻を弄せず、洵に士夫の筆なり。張米庵丑の眞蹟日錄に包山の二葵圖を載錄せり、包山の自題に云はく「壬申の端陽日、徐熙の丹粉花枝を見ることを得たり、陸治曰はく能品なり、未だ天造たらずと、庭に二葵あり因りて試に之を爲り、遂に題して曰はく姿態丰神總一機、不因丹粉諦生輝、無人識在驪黃外、却笑孫陽買骨歸」と。其の平生自矜の狀想見すべし。吾齋沈石田蜀葵立軸を藏せり、包山の此の軸と相較ぶるに隋珠趙璧、遽に甲乙し難きを覺ゆ。

陸治倣黃鶴山樵夏山隱居圖立軸

石渠舊藏

高四尺六寸六分　闊一尺五寸　紙本

淡著色畫。隸書にて「夏山隱居」と署し、小楷にて「己酉秋日、倣黃鶴山樵法、陸治」と款識し陸氏叔平、の一印を鈐せり、太上皇帝、乾隆鑑賞、樂壽堂鑑藏寶、石渠寶笈、宜子孫、內府圖書神品、三希堂精鑑璽、乾隆御玩の九璽あり、藏經紙詩塘に乾隆御題の五言律あり「丙寅三月御題」と款識し乾隆御筆の印を鈐せり、邊幅に汪由敦、張若靄、蔣溥裘曰修等の題あり、汪由敦題識の一節に云はく「治の此の幅は邱壑掩暎、蒙の家法を得て行るに蒼老の筆を以てせり、豈富春山色の意を參用せる耶、要するに其の明秀清闊、神韻流出は自ら是れ合作なり、正に優孟の抵掌して形似の閒に規規たりしが如きにあらざるなり」と。又左方上に印章を剜去せる痕あり、蓋し家藏の舊物を鬻ぐに當り、祖先の名を辱めんことを恐れて收藏印を抹消する者往往これあり。斯の如くにして書畫の雅觀を傷ふ、其の志や憐むべく、其の愚や及ぶべからざるなり。

陸治玉田圖文徵明玉田記卷

畫　高八寸六分　長四尺一寸　絹本

記　高八寸五分　長三尺一寸三分　紙本

青綠著色畫。極めて經意の筆なり、卷末に小楷書にて「嘉靖己酉仲春旣望、陸治製」と款識し、陸治之印、包山子の二印を鈐せり。

嘉靖の中葉に醫生王君といへるあり、其の居を名けて玉田と云へり、陸包山之が圖を畫き、文衡山之が記を撰し、王履約、皇甫汸、陸子傳、周公瑕の諸名家が詩を作れり、此の卷卽ち是なり。

圖繪寶鑑に包山の畫山水を論じて、荆關の遺意ありと稱し、著くる所の青綠重色は更に法を得たりと云へり。今世に傳はる所を見るに、鈎線屈折して筆致峭秀なるものと、渾淪溫潤にして筆端圭角を露はさゞるものとの二種あり。前者は中年、後者は晚年の作に係るが如し。

此の卷は包山五十四歲の作なり。

別幅に包山は詩を題し、衡山は記を錄せり、包山の詩に云はく

種玉無春冬。洪源湛藍田。千齡一葉長。九轉片時還。靈洪中丹餌。瑤花生紫烟。玄中萃光景。朗照定何年。

包山陸治畫幷題と款し陸氏叔平、陸治之印の二印を鈐せり。

衡山の記文は烏絲欄小楷書、四十行、款題を併せて凡て七百三字なり。前に「玉田記」と題し、後に「嘉靖己酉六月六日、衡山文徵明記」と款識し、前に停雲の圓印を鈐し、款下に徵明、徵仲の二印を鈐せり、衡山八十歲の書なり。衡山の小楷は老いて倍〻精嚴を極めたり、詳に筆法を檢するに字字皆大字を作るに異ならず、悉く撥鐙の法を用ゐ、結構縝密にして而も跼促の病なく、綽として餘力あるは、洵に絕詣といふべし。

衡山の記文に次ぎて王守は草書、五言律、皇甫汸は行書、五言律、陸師道は小楷七言古體、周天球は小行書、七言古詩を錄せり。皆玉田の爲に作れる所なり、詩書俱に淸麗秀雅を極め、包山の畫と相輝映せり。

大觀錄に仇實父玉田圖卷を載錄せり、款に「仇英實父爲玉田先生製」とあり、後紙に彭年は玉田記を書し王守、陸師道、周天球は詩を錄せり、之を此の陸畫の卷と對勘するに記文詩跋の辭句より時款に至るまで全然相同じ、但記文の筆者は此の卷に在りては文徵明なるに彼の卷に在りては彭年なり、又此の卷には皇甫汸の詩跋あり、彼には之を缺けるの異あるのみ。

一見不可思議の感なき能はざれど、吾齋の此の卷は書畫俱に精采煥發し、假令怪訝の眼を以て之を視るも竟に疑を容るゝ餘地なし。然れども大觀錄所載の卷も亦妄に非認すべからず。

思ふに玉田圖記の卷は、必ずしも一二に止まらざりしならん、玉田先生其の玉田圖を當時の諸名流に請ひ、畫成る每に同一の詩文を重錄せしめ以て數卷を作りたるにはあらざる歟、斯の如きは今日尙往往好事家の閒に行はるゝ風流韻事にして、必ずしも異とするに足らざる

なり。仇卷の存亡は今之を知るに由なし。

馬一龍書桃花源記卷

高一尺九分　長二尺八寸二分　絹　本

行書。桃花源記全篇三十九行。款に云はく「玉冠道人馬一龍書」と、馬一龍の一印を鈐せり、卷末に再び識語數十字ありて「嘉靖戊午孟秋閏月、月幾望、前人再記」と款せり。縑素黯澹たれども字極めて奇古玩賞に足る。

馬貧圖は弘治十二年に生れ、隆慶五年に七十三歳を以て歿せり。此の書は則ち其の六十歳の筆なり、此の書を見、而して其の遊藝集を閲すれば初めて貧圖の詩書の當時に傳稱せられたる所以を知るべし。

茲に新豐夜泊の一首を錄す、此の卷と相關する所無しと雖も、以て其の詞藻の如何を窺ふに足らん。

新豐市上酒家邊。夜泊沽來不用錢。北風吹雨欲作雪。客子到家將近年。

京國傳書千里外。剡溪路入小村前。深林舊有高人隱。尋到梅花却繫船。

豐坊書唐人詩長卷

高一尺二寸　長二十八尺三寸五分　紙　本

狂草書。李白、杜甫、岑參、王維の四家の詩、凡て八十九行、款識に云はく「九年中秋、在亦望齋寫、南禺外史」と、豐氏人季、南禺外史、既明且哲以保其身の三印を鈐せり、卷首に括陽、括陽郡圖書印、宋贈禮部尚書追封晉雲郡剴和侯益清敏府君十又五世孫の印あり、その南禺の圖章なりや否やを詳にせず、又何昆玉、梁章鉅、高培蘭の諸印並に梁章鉅の題籤及長跋あり。

此の卷の草書は字の大さ拳大より尺餘に及べるものあり。豪宕奔逸、酣嬉淋漓、張旭懷素と血戰すべし。東坡の所謂怒龍浪を噴き、奇鬼人を搏つの一語以て之に當つるに足る。梁章鉅が口を極めて賞揚せるは良に以無しとせざるなり。南禺は嘉靖二年癸未の進士なり、此の卷は嘉靖九年の作に係り卽ち其の年壯氣鋭の筆に屬す、南禺の書、余年來過目する所少からず此の卷を以て最も出色と爲す。

文嘉琵琶行圖立軸

石渠舊藏

高四尺九寸五分　闊一尺弱　紙本

淡著色畫。潯陽送客の詩意を寫せり、用筆繁ならずして烟波空茫、蘆葦蕭條、眞に楓葉荻花秋瑟瑟の趣あり。上方に行草書、琵琶行、十六行を題して「隆慶三年歳在己巳四月望日、文江草堂畫并書、茂苑文嘉識」と款識し、下に文嘉印、文印休承、の二印、前に休承の一印を鈐せり、又左方下に文氏休承の一印あり、隆慶三年は休承六十九歳なりき、乾隆御覽之寶、乾隆鑑賞、三希堂精鑑璽、宜子孫、石渠寶笈の五璽具存せり、右方下に永瑆印、安儀周家珍藏の二印あり、前者は成親王、後者は安麓村なり。

休承は家學を承ぎ、旁ら好んで倪雲林を追蹤し、蕭疎澹遠の致を極めたり、其の入神の作に至りては父翁衡山と雖も亦當に三舍を避くべし、此の軸の如き卽ち是なり。蓋し衡山の作と並んで丹青の義獻なり、畫上の書また秀美絶倫、光華陸離たり、人をして觀止の歎あらしむ。

文伯仁四萬圖屏軸

高六尺二寸八分　闊二尺四寸五分　紙本　四屏軸

墨畫。每軸董玄宰の題識と五峯自筆の畫題あり、畫題は皆冠するに萬の字を以てせり。

第一軸、萬頃晴波

右方上に「萬頃晴波」と署し。「文伯仁」と款して下に文伯仁德承印前に雅歌堂の印を鈐せり、上段に遠山を寫し、下段に樹石荻蘆を配し、中段の空處は縱横四五尺、盡く細縠水紋を繪き飛雁數行、漁舟一二、縹渺として人間煙火の外に在り、董其昌は「此圖學趙文敏、有湖天空濶之勢、吾家水村圖政相類、董其昌題」と題して太史氏、董其昌の二印を鈐せり、藏印一あり。

第二軸、萬竿烟雨

上方に「萬竿烟雨」と署し、前に雅歌堂の印を鈐し、右方下に「五峯山人文伯仁」と款して文伯仁德承印の印を鈐せり。圖は江流を挾める兩岸に叢生の野竹を寫せり、細竿密葉、大小參差、浙瀝として聲あるが如し。董其昌は「此圖學董北苑、尤見力量、玄宰」と題し、董其昌の三字印を鈐せり。

第三軸、萬壑松風

「萬壑松風」と署し、「長洲文伯仁寫」と款して文伯仁德承印の一印を鈐せり、全幅邱壑崚嶒として寸尺の餘地を剩さず、喬松十四五株其の間を點綴し、潑翠峭逸を極む。松下に人物三四、徘徊逍遙の狀を爲す、頗る匠心を費して而も神韻極めて饒し。董其昌は題して云はく「此圖

倣倪雲林、所謂士衡之文、患于才多、蓋力勝于倪、不能自割己、兼陸叔平之長技矣、玄宰題」と、太史氏、董其昌の二印を鈐せり。

第四軸、萬山飛雪

「萬山飛雪」と署し、「嘉靖辛亥、文伯仁爲汝和先生寫於金臺客次」と款識して文伯仁德承印の一印を鈐せり。嘉靖辛亥は德承正に五十歳なり、圖は寒江凍嶺を寫し、皴染せず著色せず、純ら鈎描の法を用ゐて、疎朗明秀の致を極め、山河凍冷の意、十分酣足す。右方下に子有の印あり。

以上四屏軸は皆宋人の白描山水法を倣ひて、疎密相間はり種種變化を極む。眞に五峯一代の大作なり。五峯の畫、恐らくは此の右に出づるものなからん。

之を著錄に徵するに、五峯の白描山水に秋山皷琴圖あり。此の四屏軸と筆法相似たるが如し、論者評して曰はく

宋の李伯時に一種の山水あり、挺勁の筆を以て細鈎し、邱壑は多く皴擦無く、極陰の數處は淡墨を用ゐて之を染し、以て前面極陽の坡石を拓出せり。樹木は或は點葉、或は鈎葉、皆極めて細乾にして根幹分枝は條理明晰なり。人物屋宇は渲染を加へず、大致これ畫中の飛白なり。此の法は元人爲らず、清人爲らず、明人は文氏に於いても亦多くを見ず、卽ち之有りとも亦文門下の人のみ。故に北宗の白描山水を追蹤せるは獨り停雲一人を推す。五峯は本より家學を守り、高簡冷雋にして人世不傳の秘を傳へたり。

洵に此の言の如く宋時の脈流を酌みて白描山水を畫けるものは歷代の名家中、惟衡山あるのみ。而して文門の子弟中に在りては惟五峯あるのみ。清の錢叔美亦時に此の法を用ゐたり、則ち文門を追蹤せるなり。吾齋收藏の衡山の老柏寒鴉圖と、此の文五峯四萬圖とは、俱に古法を絕響せんとするに救へるものにして、洵に藝林の墨寶なり。

往昔倪雲林は陶南村の爲に畫册十幅を作り、每幅畫題、冠するに皆「萬」の字を以てし、名けて十萬圖と云へり。萬笏朝天、萬丈空流、萬林秋色、萬卷書樓、萬樹香雪等是なり、王石谷嘗て臨本あり、今尙世に傳はる、文五峯の此の四屏軸も亦皆萬字を冠せり、名けて四萬圖と云ふ所以なり。

文伯仁山水立軸

石渠舊藏

高四尺二寸三分　闊一尺二寸七分　紙本

淡著色圖。款識に云はく「辛酉春日、五峯文伯仁寫」と、文伯仁、五峯山人の二印を鈐せり、乾隆

御覽之寶、乾隆鑑賞、三希堂精鑑璽、石渠寶笈、宜子孫の五璽具はる。又下に林宗遠收藏印と繡鶯閣との外一印あり。辛酉は嘉靖四十年なり。卽ち此の軸は四萬圖に後るゝこと十年、五峯六十歲の作なり。

莫雲卿は嘗て五峯の秋山晴翠卷に跋して云く「昔人稱すらく顧愷之は樓に登りて研精すること二十餘年、出てゝ便ち當代に重んせらる、文徵君德承は山樓に獨居して、跡を城市に絕ち、筆墨の外、別に他營無し、其の直ちに古人に造れること、良に虛しからざるなり」と。畫を以て品第すれば、文門の子弟中、當に五峯を推して第一とすべし、その天分に負へる所多かるべしと雖も、亦力學の致す所たらずんばあらず。

文伯仁潯陽送客圖卷

朱彝尊書琵琶行

文伯仁畫　高六寸八分　長一尺九寸六分　紙本

朱彝尊書　高六寸八分　長三尺三寸

前幅、淡著色圖。琵琶行の詩意を寫せり、寒月江波を照らし、衰蘆夜風に戰く、楓岸の舟中に四五人あり、其の小なること蟻の如きもみな丰姿を見るべし。細描巧緻、兼ぬるに雅韻を以てす、五峯平生の傑作なり。隸書を以て「潯陽送客圖」と署し、小楷にて「五峯山人文伯仁寫于停雲館中」と款識し、文伯仁、五峯の二印を鈐せり、右方下に竹垞審定の一印あり。

後幅。朱竹垞の行楷書、琵琶行凡て五十五行。前に朱の一印、後に竹、垞の連印を鈐せり、又下に、莅林審定の一印あり、梁章鉅の鑑記なり、拖尾に吳可舟錫嘉の一跋あり。吳跋に依れば此の卷は宋漫堂の舊物にして、後、吳荷屋に歸し、荷屋より可舟に贈られ、乾隆丙戌夏六月、暑を廣陵の夕陽紅半樓に避け、桂未谷、羅兩峯、李耳山、吳山尊と俱に此の卷を展觀せりと云ふ。白樂天の琵琶行は千古の絕調なり、文氏の駿足五峯は之を圖にし、有淸一代の詩人竹垞は其の全篇を書せり、洵に三美兼具はると謂ふべし。漫堂荷屋の諸公之を珍襲し、未谷兩峯山尊の諸名士、同觀歎賞せしも亦良に以なきにあらず。

王問山中訪友圖軸

高五尺三分　闊二尺五寸三分　紙本

墨畫。頗る元人の意あり、款題に云はく

絕巘流孤雲。主人興不淺。有約山中來。誰想花源遠。　仲山王問寫

下に子裕、輿司馬の二印、前に可吟亭の一印を鈐せり、右方下に張式審定等の藏印凡て五あり。

仲山の翰墨は當時推されて三吳の冠たり。陳眉公は其の詩の盛唐に類し、其の畫の宋元に入れるを稱しき。陸潤之は曰はく「明の書を善くせし者に三人轍を合せるあり、陳白陽、文三橋、王仲山なり、其の結構轉折、用墨落筆相似さるなく、余皆之を好めり、白陽三橋を見ることは頗る多けれども仲山の書畫は甚だ少し」と。卽ち仲山の筆墨は當時に重んぜられしも乾隆時代に至りては已に流傳の極めて罕なりしを知るべし。

錢穀林泉高逸圖立軸

高五尺一寸　闊二尺七寸一分　紙本

墨畫。疎筆を以て樹石を寫し、白描を用ゐて垂綸の人物を畫けり。萬曆二年冬十月、爲百穀摹石田翁臨黃鶴山人林泉高逸圖、彭城錢穀」と款識して叔寶、縣磬室の二印を鈐せり。後に王穉登の小楷長題あり、「題林泉障子、奉送思重中軍北上、乙亥夏四月廿四日、王穉登」と款識し王氏百穀の印を鈐せり、又華步寒碧莊收藏、蓉峯鑑賞、劉恕家藏、擇石書畫、載之家藏等藏印凡て十あり、卽ち錢擇石及び劉氏寒碧山莊の收藏を經たるを知るべし。

此の軸は磬室六十七歲の時、畫きて之を王百穀穉登に贈れるものなり。源流は黃鶴山樵より出でゝ閒ふるに沈石田の筆意を以てし、蒼老秀闊、書卷の氣、楮墨の外に漲溢せり。のち百穀は詩を題して此の幅を其の友思重に贈りしことは題識に依りて明かなり。詩中に「但逢客裏披圖處。莫忘林中把釣人」の句あるを見れば圖中の人物は百穀自ら之に擬したるものゝ如し。當時王弇州世貞は又磬室に乞ひて溪山深秀圖を畫かしめ、吳中の名士俱に歌を作りて之を賞羨せり。或は弇州が此の圖に依りて歸田の意を寓せるにあらざるかを疑へり、弇州辯じて曰はく「人或は余が寄する所ありと謂へるは則ち然らず、大丈夫山水を好まば、便ち當に朝市を謝し去るべし、安ぞ用て役役として此に寄することをせむ」と。百穀は初めより山林の人を以て自ら居り、磬室の畫を藉りて之に擬し、弇州と向ふ所を異にせるは各其の境遇の相異なるが爲ならん。

錢穀赤壁舟遊圖立軸

高三尺一寸七分　闊一尺一寸八分　紙本

著色畫。江波、舟楫、人物は細緻の筆を用ゐ、頗る文衡山に似たり。磬室は畫を衡山に學べり、これ其の手法相類する所以なり。「隆慶庚午上元日、錢穀寫」と款識し、叔寶、錢氏叔寶の二印を鈐せり、磬室六十三歲の作なり、吳雲平生心賞の藏印と、外に鈐印四あり。

茅坤自書雜詠卷

高九寸　長十七尺四寸　絹本

此の卷は詩翰二幅を合裝せり、第一幅は絹本、草書。七言律詩十一首。賦一首。「萬曆丁酉秋九月九日、治下茅坤頓首拜書、時年八十有六」と款識し茅坤私印、麓門山中人の二印を鈐し、拖尾に復ひ七言律詩一首を書し、「十一月三日坤再頓首拜呈」と款識し、茅坤私印の一印を鈐せり書法瘦勁、寒林に入りて枯樹を見るが如し、但草體奇肆にして頗る解し易からず、乃ち煩を厭はす、全詩を錄して之を讀むに便ならしむ。

龔穀初公、近以方伯之命、再過我浙、詩以迎之。

不逢冠蓋幾經秋。忽報移官浙上遊。三竺泉聲疑綰帶。六橋波影欲廻舟。
入郊問俗刀錐礦。行郡採風煙雨樓。樓卽翁初舊建於秀州者　野老獨憐戴白髮。　樵蘇牧豎
共歌謳。

附錄近作詩賦之什、併求覽教。客有譚筠州佳山水者、題寄一首

眉州山水擅中原。千里星河掌上捫。紺殿琳宮懸日月。羽衣芝蓋傲乾坤。
洪厓綺季共蕭逸。沆瀣煙霞互肚呑。安得辭家浮絕壑。一聲鐵篴過天門。

自詠一首

八十年來鬢已皤。麗眉禿項半頭陀。據梧閒讀列仙傳。倚石偏躭擊壤歌。
已看花陰移枕簟。併聽鳥語度巖阿。閉開長日渾無事。一炷名香伴碧蘿。

別郡邸賦歸一首

竭來不到郡城邸。三過花深堪自憐。芝蓋强携麋鹿市。鶡冠仍挂薜蘿煙。
非躭方朔陸沉日。却愧榮期帶索年。此夕仰天忽大咲。東歸故里種瓜田。

劉哨牴以革職還山、賦詩慰之二首

憐君帥府領牙兵。持擊俠飛藝絕精。五石挽强橫海幄。千夫決鬬伏波營。
豈期末路被讒搆。漫道先鋒勒罷名。我亦朔南大戰後。久辭鵲印臥江城。
手携黃石舊兵符。幾看南山搏虎圖。却咲當年習兵訣。不如花下對氷壺。

安期抱策逃東海。范蠡成功避五湖。從此孤山與三竺。可能雙綰鹿車無。

九日書懷一首

九日巖前過雁流。閑開不覩菊花秋。無朋無酒嘲形影。午嘯午歌呼馬牛。
獨拊朱絃調白雪。聊支角枕臥丹丘。唉看忽落風前帽。翻著黃冠賦遠遊。

送劉方伯蔡臬使兩公入覲一首

萬國車書闔華夏。五雲日月照乾坤。冠裳共赴中天會。藩臬雙乘使者軒。
金馬銅龍陳象魏。朱衣絳節扈朝元。遙瞻奏記甘泉殿。賜鐵傳餐拜帝恩。

湖上自壽一首

漂渺煙波矚上臺。西湖暫作歲星臺。恍聞青鳥傳笙竹。疑扈仙靈獻壽杯。
紫嶠丹峰雲外舞。琪花瑤草望中開。掀髯拄杖凌風問。海屋添籌第幾廻。

湖上偶詠一首

長日不逢冠蓋過。獨支角枕臥煙蘿。窓前聊對包犧易。檻外忽聞樵斧歌。
恍似洞簫吹海上。却扶筇杖傍巖阿。翛翛宴坐少人跡。一炷名香俯碧波。

贈醒神翁　翁卽王威寞、今客西湖、年百七十餘矣

誰解醒翁碧落仙。半遊蓬島半逃禪。囊中五色長生草。肘後一瓢滄海烟。
澹宕幾邀天上月。逍遙不挂杖頭錢。醉來嚮我發微咲。閒抱白雲洞裏眠。

釋噱賦

髯翁年踰八十、獨秘泉石。世或噱其不善宦兮數被執政者之摧擊。然日月已逝兮、事嘗化之三點。譬雲影之隨飆而駛兮。又奚足爲欣戚。嗟予解紱還山兮、今已四十餘禩。無問世幻與風波兮、聊閉開而聞寂。或爲陶弘景、或爲何子晳。或爲管幼安、或爲張仲蔚。或爲劉蚪、或爲宗測。或爲部瑀、或爲索襲。土人過之、非二仲之挫廉而逃名、卽孫登之彈琴而論易。巾車其愛者、王逸少與支遁。躧履其憂者、賀知章與李白。天地爲帷幕、煙霞爲枕席。對明月而響洞簫、韻清風而吹鐵遂。知之者數呼之爲物外司馬、不知之者僅稱之爲騷壇詞客。醉則以酒而漉巾、醒則染翰以戲墨。況仲子棄官而來歸、數扶杖而侍側。築名園而綰以仙人舞袖峰、穿曲池而檻以處士少微室。嘉樹成兮、芳草紛積。朝烹乳鹿脯、夕獻天鵝汁。豆陳海陸錯、篚將棗栗實。閒鳴鐘鼓、併奏琴瑟。延賓朋其徜徉、共歌舞以蕭逸。當斯時也、龜組非我榮、魚袋非我適。狎北沼之鳧雁、採南山之芝术。半搴宕叟帶、半習長生術。罄丙夜以達旦兮、那問東方之日出。

萬曆丁酉秋九月九日、治下茅坤頓首拜書、時年八十有六。

右重陽日、顒使賀之。武林豈謂我翁於今仲冬矣、猶爾留滯、再爲賦詩勸駕云。

西宜循吏龔君最。留滯周南久不過。吳越山靈迎欲舞。東南海若澹無波。

一琴一鶴單車入。舊吏舊民擁傳多。安得朔風催驛路。使星中夜挂巖阿。

十一月三日坤再頓首拜呈

此の詩は龔毅刑公に呈せし所なり、龔公未だ其の傳を詳にせされとも、當時の顯官たりしが如し。鹿門は徐天池渭と共に胡宗憲の幕客として、又唐宗八家文の編者として其の名尤も著れたれども、其の墨蹟を吾が邦に見るは此の卷を以て嚆矢とす。穰梨館過眼錄及び續錄に其の詩翰册を載錄せり、これを除きては、また著錄に載せたるものを見ず。

周天球吳楚一望圖立軸

高六尺六分　闊一尺七寸六分　紙本

淡著色畫。大江汪洋として流れ、奇峯突兀として峙つ、峯頂人あり江を隔てゝ遙に遠山を眺む、老松江岸に蟠り、扁舟波上に漂ふ。布景宕落、筆墨空靈、洵に公瑕一代の大作なり。款題に云はく

孤峯矗矗□青天。吳楚臨高一望連。萬里江流衣帶水。夕陽時送出巴舩。　周天球

下に止園居士、周氏公瑕の二印を鈐せり、汪氏柯庭秘玩、季青鑑定眞蹟、摛藻堂書畫印、平陽李子收藏圖書等藏印凡て六あり。

公瑕の畫、常に見る所は蘭竹の類を多しとす、閒〻山水に逢ふことあれとも、亦小品に過ぎず。而も文門高足の能事は此に盡きたるにあらず、其の蘊蓄を傾盡するに當りては。堂堂たる大作、尋常作家の膽を奪ふものあり、此の軸に於いて之を知るべし。

晚香堂集の敍姚叔信詩の一節に云はく「周公瑕は八十以後聞ゆる無し、度るに生半の著作は筆塚に幷せ入れて、便ち泰山無字碑と作りしにあらさるが」と。公瑕の著作も其の書畫と共に、明季既に見易からざりしこと、此に據りて知るべし。余三百年後にして此の大作に逢ふ、翰墨の清福、亦復淺からずと謂ふべし。

周天球楚皋清馥圖卷　附幽蘭賦

高一尺六分　長八尺三寸　紙本

墨畫。蘭竹に配するに靈芝文石を以てし六止居士、周氏公瑕の二大方印を鈐せり、引首に「楚

臯清馥」の四字を自題し、卷後に幽蘭賦を錄せり、草行書、四十七行、「隆慶壬申秋九月十又三日、錄于俠香亭中、群玉山樵周天球」と款識して周氏公瑕、止園居士の二印を鈐せり、公瑕五十九歲の作なり、葉東卿、韓榮光諸家の藏印あり、蘭竹は清楚絕倫にして、幽蘭賦は宛然其の師文衡山を見るが如し、書畫雙絕なり。

彭年種芝堂記册

高七寸四分　闊三寸　計十一頁　紙本

楷書、凡て五十行。首頁に「種芝堂記」と署し、末頁に「嘉靖三十有七年八月十日、隆池山樵彭年著」と款識して舊吳、隆池、彭氏孔加の三印を鈐せり。

孔加は嘉靖四十五年に齡六十二歲を以て歿せり、此の册は卽ち其の五十四歲の作なり、書法謹整遒勁、眞に孔加作中の精品なり、朱玖玥の舊藏に係る。

徐渭牡丹立軸

高一尺九寸　闊一尺二寸　紙本

墨畫。款題に云はく

毫端紫光百花開。萬事惟逢酒一杯。茅屋半閒無得住。牡丹猶□起樓臺。　徐渭

徐渭之印、文長氏の二印を鈐せり、懶眞子、章氏鑑賞の藏印あり。

古來牡丹を畫く者多くは濃彩重色し、艶冶を以て勝を取れり、李唐未だ志を得ざりしとき、畫を賣りて自ら給せり、その畫時人の賞鑑に入らざるを笑ひて「早知不入時人眼、多買臙脂畫牡丹」の句あり。牡丹と艶彩は由來因緣淺からざるを知るべし、惟陸包山、陳白陽、孫雪居等は淡彩水墨を以て之を畫き、瀟灑出塵の致、自から流俗に異なるものあり。青籐亦其の奇肆の筆を以て之を寫し、嫵媚豐肥を擺脫して、造物を毫端に仙化せり。晴日明窓に此の軸を挂け、茗を啜りて之を觀れば丰姿綽約、風神楚楚、恍として洛神を煙波の上に望むの感あり。

徐渭擬鳶詩畫卷

第一幅　題　字　高一尺九寸　長二尺五寸四分　紙本

第二幅　紙鳶圖　高一尺九分　長四尺七寸

第三幅　紙鳶詩　高一尺九分　長六尺六寸九分

卷は題字、畫、詩の三幅より成る、皆天池の筆なり。

第一幅　尺許の大行草書を以て「擬鳶圖」の三字を署し「天池」と款し、秦田水月、文長、山陰布衣の三印を鈐せり。

第二幅　小童、紙鳶を揚ぐる圖を描き、配するに土坡樹木を以てす、四五寸許の行草書にて「漱漢墨譫」の四字を署し秦田水月、青山捫虱、袖裏青蛇、天池山人の四印を鈐せり、畢瀧審定、懷民珍秘、臨川李達九所藏書畫印の藏印あり。

第三幅　行書、放鳶詩、識に云はく

郭恕先爲富人子作風鳶圖、富人子怒、而謝絶、意其時圖必毀裂、余摹而擬作之、恕先何人、余殆蹤鶩逐驥耳、輩髣渡海禮補陀、那得便見一葉蓮、相取其意而已矣、王元章放鳶詩、元十一首、存者八首、先子抄本具焉、當亦慕恕先作也、因書於此。

次いで王元章の七言絶句八首を錄し、「田水月」と款を署し徐渭、天池山人の二印を鈐せり、又「田水月和元章先生」と識して、自作和韻詩八首を錄し、文長、天池山人、青籐道士の三印を鈐せり、臨川李氏及諸家の藏印凡て七あり、玆に八首中の一を錄す。

剡藤湘箋一片雪。髣髴孤飛埜鶴雲。貌取此圖償酒債。未爲輕薄有錢人。

天池は詩文書畫、皆之を能くせり、袁宏道は謂ふ「徐天池は人、詩よりも奇なり、詩、文よりも奇なり、文、字よりも奇なり、字、畫よりも奇なり」と、其の實は畫を以て、尤も奇絶とすべし。故に陶梟亭は其の越畫見聞に論じて言はく「文長の筆墨は當に畫を以て第一と爲すべし、書之に次ぎ、詩又た之に次ぐ、文は下に居る、其の書は縱筆太甚しき所ありて、未だ野狐禪たるを免れず、故に僞作し易し、其の畫に至りては高超淸遠、慧心の人と雖も、猝に摹倣し難し、是を以て一たび卷を展ふれば眞贋了然たり」と。詩は朱竹垞之を評して云ふ「文長の詩は長吉に原本し、間宋元の流派を雜ゆ、所謂斐然として章を成し、之を裁する所以を知らざるものなり。其の自評に吾は書第一、詩は二、文は三、畫は四なりと云へり。然れども詩文は未だ繁蕪を免れず、畫品の小塗大抹、俱に高古なるに若かざるなり」と。此の卷、畫は澹宕超逸、書は蒼勁奇健にして、後人の得て追蹤すべき所にあらず。而して其の詩も亦警句に富み、凡庸に陷らず、竹垞評して未だ繁蕪を免れずと云へるも、彫琢の臭氣無きは、却つて詩人の詩に勝れるが如し。

徐渭花卉蟲魚卷

高八寸五分　長九尺六寸　紙本

墨畫。四段に分ち、第一段は秀石篠竹杏花、第二段は牡丹、第三段は魚蟹蔬瓜、第四段は萱艸蟋蟀なり。每段畫後に系くに詩を以てし、卷末に款識して云はく

萬曆辛卯重九日、史甥携豆酒河蟹、換余手繪、時病起初見無腸、欲剝之劇、卽煮酒以啖之、偶有舊紙在榻、潑墨數種、聊以塞責、殊不足觀耳、　天池山人徐渭書於葡萄最深處

每段、筍孤、孺子、天池、青藤道人、徐渭、徐渭印、東庵、文長の諸印を分鈐せり。辛卯は萬曆十九年にして、時に道人七十一歳、卽ち歿前三年に當れり。拖尾に楊佶、祁豸佳、徐沁等の跋あり。祁跋の一節に曰はく「青藤道人は晩年錐耳鎚囊、食を絶ち糧を休め、狂疾ありしに似たり、實に仙班なることを證す。其の詩文は具論せざるも卽ち其の泚筆落瀋は皆仙氣あり、所謂雲海盪胸、筆、意に隨つて到るものなり、玉漿を吸ひ玄虬に騎し、風を凌ぎて直上するものにあらずんば、何を以てか此に及ばんや」と云へり。

前人の畫論に云はく「白石翁の蔬果は元人の法を得て、墨氣渾淪、自らこれ有明に獨步せり、陳道復は筆致瀟洒なれども渾厚は少しく遜り、青藤は筆力餘りあれども、未だ放逸の所あるを免れず。然れども是の三家出てゝ而して餘子は落落たり矣」と。此の卷は都て意を以て之を寫し、放膽雄肆にして逸致溢るゝが如し、所謂「意足不求顏色似」とは卽ち是なり、天池道人を除きては五百年遂に此の筆墨なし。

宋旭達磨像立軸

高二尺四寸　闊一尺四分　紙本

著色畫。蓆上趺坐の老禪を寫せり、朱衣黑髯、俯視沈思の狀、正に是れ面壁九年の人なり。款に云く「檇李宋旭焚香拜寫」と。宋旭之印、石門山人の二印を鈐せり。

石門は博學の人にして山水を能くし、平生好んで羅漢佛像を畫けり、是れ深く禪理に通ずればなり。

宋旭浮嵐暖翠圖立軸

高五尺二寸五分　闊一尺四寸八分　絹本

墨畫。樹態山容、直ちに梅道人に逼り、一筆も北宗の臭氣無し。「萬曆癸卯暮春、寫倣元人吳仲圭臨宋僧巨然浮嵐暖翠圖、石門山人宋旭」と款識し、宋旭之印、石門山人の二印を鈐せり。下

角に畢瀧澗飛氏藏の一印あり。

石門の畫は浙派として之を誚るものあれど、又之を評して「北宗の面目を襲取し、獷猛を以て其の性靈を掩ふ者は安んぞ、此の駘宕幽邈の筆あらんや、讀者浙派なるに因りて其の聲價を抑ゆべからず」といへるもあり、是れ實に時好に阿らざるの評なり。

宋旭槐下高士圖立軸

高一尺九寸八分　闊一尺九分　紙本

淡著色畫。老槐二株、一は矗立衡天、丈夫の如く、一は婆娑蹣跚、醉翁の如し、下に一高士、杖に倚りて仰視の狀を爲し、一童琴を抱いて立てり。「隆慶壬申初夏之望、檇李宋旭戲作于華亭之采眞館」と款識し石門居士、檇李宋旭の二印を鈐せり。

此の圖、描法は源を宋元に探りて、別に機軸を出し、古意新趣兼至る。蓋し石門出色の作なり、後の學者、額に汗して之を倣はんと欲するも、竟に此の神境に至る者なし、石門の大名ある豈偶然ならんや。此の軸は溪頭觀山圖と俱に紙素潔淨にして筆墨新なるが如し、眞に宋蹟中の精品なり。

北京の畫家王益庵夢蘖に此の圖の臨本あり。大正甲寅、日華繪畫展覽會に於いて之を見るを得たり。因つて購ひ歸りて原本に配置せり。原本民國に在りし時、妙蹟として其の名、畫苑に噪かりしを知るべし。

宋旭溪頭觀山圖

高二尺一寸一分　闊一尺一寸二分　紙本

淡著色畫。山に懸泉あり、溪に激湍あり、巨巖流に臨んで聳立し、巖上に人あり佇立して山を觀る。「壬午立夏日、石門宋旭寫」と款識して宋旭之印、石門山人の二印を鈐せり、下角に公度審定名蹟の一印あり、壬午は萬曆十年なり。

此の圖筆力遒勁、之を沈石田に比するも多く遜らざるを覺ゆ。惟石田は南宗の正系を繼き、梅道人に於いて特に私淑せし所あり、石門は古法を追蹤せりと雖も、亦別に法門を開けり、爲に往往誤りて浙派を以て目せらる。董玄宰が南宗畫を高唱してより以來、苟も南宗の格律に合せざるものは、斥けて異端と做し、以て今日に至れり。石田の名高くして、石門の之に如かざる所以、知るべきのみ、若し力量を以て之を論ずれば、石門は必ずしも石田の下風に立つ

ものにあらざるなり。

宋旭江寺晨曦圖卷

高九寸一分　長八尺五寸八分　絹本

淡著色畫。江山蕭寺の圖なり。朝暾纔に出て、曉煙未だ散せざる所、寫し得て奇絶を極む。卷末に隷書を以て「江寺晨曦」と署し、小行書にて「萬曆戊子秋仲望後二日、檇李宋旭」と款識せり。石門は隷楷を善くし、其の得意の畫には八分を以て題識せりと云ふ。蓋し此の卷の如きは卽ち其の一なり。

張浦山は其の畫徵錄に、云はく「余少時、鄉の前輩の畫を論ずるを聞きしに、宋旭、藍瑛に至る毎に、輙ち深く之を詆諆せり。後、宋の畫ける輞川圖卷を見たるに、元本を襲かずして自ら機軸を出し、皴擦は則ち黃鶴山樵の法を用ゐ、恣に浚邃を極めて而も一に自然に出でたり、實に有明一代の作手たり、獨り詆諆すべからざるのみならず、乃ち學者の當に急摹すべき所のものなり。奈何してか田叔と一例に抹倒せるや、前輩の畫を論ぜしこと疏なり。吾鄉今に至るまで其の說を沿習す、故に亟かに其の冤を辯ずべきなり」と。洵に確論なり。

莫雲卿天開洞壑詩立軸

高五尺四寸一分　闊一尺三寸　紙本

草行書三行。詩に云はく

天開洞壑兩峯蟠。地俯鮫宮六月寒。君去正逢秋色早。平湖落木鏡中看。

「雲卿書」と款し莫廷韓、芷陽山人の二印を鈐せり、陸鍾輝印、子孫永保の二藏印あり。

廷韓の書は宋の四大家に淵源し、其の草書は最も蒼秀宛轉の妙を極めたり。陸時化は廷韓の父、子良方伯の卷後に跋して云はく「廷韓の書法は遠く方伯に勝れり、余か見たる所甚だ少し、曾て華亭の舊家に至り、遍く之を搜して、竟に得られざりき、董宗伯其の己に勝れるを惡み、重價を出し、收めて之を焚き、第一人たるを冀へりと謂ふ」と。是れ固より一場無稽の巷話に過ぎざらんも、斯の如き傳說の生ぜしを見ても、廷韓の書は董其昌の下風に立つものにあらざるを知るべし。

莫雲卿新豐美酒詩立軸

高四尺三寸五分　闊一尺三分　紙本

行草書。詩に云はく

新豊美酒斗十千。咸陽游俠多少年。相逢意氣爲君飲。繫馬高樓楊柳邊。

「雲卿書」と款して莫印廷韓、游心太玄の二印を鈐せり、此の軸は筆勢軒昂、墨采飛動し、眞に快心の作なり。其の似たるものを求むれば、陳道復之に近し。

莫雲卿尺牘册

高　不同　闊　不同　紙本

手札八幅、大小同じからず、中一幅は小楷書にして、他は皆草行書なり、雲卿の書は古來定評の有るあり、今また之を說くの要なし、但此の手札は日常應酬の筆にして、其の意を用ゐざる所に、却つて天眞流露し、更に一段の妙趣を見る。

丁雲鵬洗象圖立軸

高三尺八寸四分　闊一尺六寸三分　紙本

著色畫。菩提樹下に一羅漢趺坐し、數人環侍し、前に巨象あり、人物三四、洗象の狀を爲す。傳彩濃艶、描線巧緻を極む。紙素損壞し、補修の痕あれども幸に雅觀を妨げず。「甲申三月之朔、弟子丁雲鵬敬寫」と款識し、下に雲鵬之印、丁南羽の二印を鈐せり。甲申は萬曆十二年なり、乾隆御覽之寶、乾隆鑒賞、三希堂精鑑璽、宜子孫、秘殿珠林の五璽あり、卽ち了淸內府の舊物たるを知る。

方蘭士云はく「近代、人物は丁南羽、陳章侯、崔靑蚓の如き皆絕類出群の手筆にして、落墨賦色、精意毫髮、鼎足と爲すべし。惟崔陳は有心にして古を辟け、漸く險恠に入れり、刻剝巧妙を極むと雖も已に散乘小果に落ちぬ。丁氏が一に平整を以て法と爲し、自ら是れ大宗たるに若かず」と。一隻眼を具する言なり。

丁雲鵬羅漢立軸

高一尺九寸七分　闊一尺一寸五分　絹本

著色畫。蓆上に趺坐せる朱衣の羅漢を寫し、描雲の法を用ゐて衣皺を畫き、頗る妙なり。款なし、南羽の一印を鈐せり。南羽の羅漢佛像は、其の絕妙なること李龍眠、趙子昂以降の第一人

と稱せらる。嘗て董玄宰の爲に大阿羅漢を寫し、玄宰酬ゆるに毫生館と刻せる印章を以てせりと云ふ、以て其の當時の推重を見るべし。

丁雲鵬過海羅漢卷

高九寸八分　長十二尺七寸　絹本

淡著色畫。羅漢凡て二十、龜鼉魚龍、河伯海若の類、之を載せて海を渡る。卷末に小楷書を以て「萬曆壬寅秋、海陽丁雲鵬寫」と款識し、丁印雲鵬の一印を鈐せり、壬寅は萬曆三十年なり。此の卷傳彩清淡にして、運筆精緻、描線は細なること糸の如く、勁なること鐵の如し、功力を費せること甚だ大なり。羅漢の風丰は極めて高逸にして毫も塵俗の氣無し。凡そ功細の畫は多くは院體の臭味を脫せず、此の卷の古澹超逸にして一種の禪味を帶べるが如きは尠し。若し款を掩うて之を龍眠と言はむも人必ずしも不可とせざるべし。蓋し南羽出色の作なり。縑素處處に蠹蝕の痕あれども、大觀を妨げず。

丁雲鵬歲暮歸山圖立軸

高二尺三寸七分　闊一尺四分　紙本

南羽は人物佛像を以て名あれども、其の山水に至りては之を識るもの尠し。畫史彙傳には南羽が學問幽邃、用筆古俊なるを稱せり。此の軸は淡著色畫、筆意全く黃大痴より來り、淵源する所極めて深し、上方に小楷を以て款題して云はく

歲暮歸山中、賦別鳳泠六兄及江諸干子

驪歌一曲送長途。去路誰當問棄儒。旅食久依叢桂冷。歸帆遙帶片雲孤。
河橋氷雪淹行李。官閣梅花映酒壚。回首春明烟水闊。雙魚莫惜寄潛夫。

乙酉臘月之望、雲鵬錄于上方并畫

南羽の連印と、聖華の橫印を鈐せり、下角に秋枚沈淸寓賞、萊山眞賞の二印あり。南羽は聖華居士とも號せり。乙酉は萬曆十三年なり。南羽の書は鍾王を法とせりといふも此の題字は頗る文衡山に近きを覺ゆ。

李麟降龍羅漢圖立軸

高三尺二寸七分　闊九寸九分　紙本

淡著色畫。羅漢天を仰ぎ龍を招ぐ狀を寫せり。傳彩清淡にして描法細緻なり。「龍眠後身李麟敬繪」と款し、次公の一印を鈐せり、宮爾鐸の藏印あり。

次公は丁雲鵬の高足にして、自ら李龍眠の後裔と稱せり、其の畫ける佛像人物は焦墨粗鈎のものと、白描細緻のものとの二種あり。圖繪寶鑑に謂ふ所の「下筆蕚葉の如く、用墨焦にして其の枯を覺えず、眉目粗にして其の重を覺えず、筆を擧げて章を成し、思索を假らざるに似たり」とは次公の筆を指せるなり、而して其の白描の法を用ゐるものに在りては、全く李龍眠を追蹤して、精緻細巧を極め、而も生動の致を失はず、南羽と雖も多くは之に過ぐる能はず、此の降龍羅漢圖と、後の釋迦說法圖は則ち細筆の一種にして、良に出藍寒氷の作なり。

李麟釋迦說法圖立軸

高二尺七分　闊九寸九分　紙本

墨畫。垂眉慈顏、長笻に倚りて立てるは釋迦なり、扁頂巨眼、坐して佝僂の如くなるは提婆なり、提婆の頭上より一縷の煙雲騰上し、中に菩薩の尊容を現す、發菩提心の意なるが如し。前後に竹石を寫して配景とせり。小楷にて「龍眠後身李麟敬繪」と款し、次公の印を鈐せり、劉氏寒碧莊印、臥庵所藏、子孫保之の三印あり。

此の軸、描線の纖細なること絲髮に似、眉目宛として生けるが如し、眞に白描の能事を盡せり、若し夫れ其の畫品を論ずれば、十洲に頡頏し南羽と駢鑣して愧ぢざるものと謂ふべし。

項元汴荷花圖立軸

高四尺五分　闊一尺四分　紙本

墨畫。右方上に句を題して云はく

多情有恨無人見。　月曉風清欲墜時。　墨林道人

下に寄傲、項元汴印、子京父印の三印を鈐し、左右の下に淨因庵主、項叔子、墨林山人の三印を鈐せり。

墨林は有明一代鑑藏の大家として人之を知らざるは無し、其の收藏せし書畫の今に傳はれるものに精品頗る多し、遂に其の印章の有無を以て直に書畫の眞贋を測る者あるに至れり、而かも其の筆墨の流傳せるは甚だ少く、余藏する所、亦唯此の一幀のみ。筆致瀟洒にして塵俗を脫化し、逸品の域に入れり、乃ち墨林の能事は惟鑑識に止まらざりしを見るべし。董其昌

は其の書生たりし時より、屢〻墨林の天籟閣に至り、名蹟を縱觀し、又親しく墨林の詩畫を見ることを得て、其の清微高逸に心折せりと云ふ。玄宰が天才卓出にして書畫に精詣なりしは之を云ふの要なしと雖も、其の脫胎變化は蓋し天籟閣に負ふ所無しと云ふべからざるなり。玄宰は後年墨林の墓誌を撰し、中に言へるあり、云はく「子京は夷然たる大雅にして、自ら權勢に遠かり、與に遊べる者は皆風韻の名流、翰墨の時望なり、文壽承、休承、陳淳父、彭孔嘉、豐道生輩の如きも、或は臂を把りて過從し、或は書を遺りて問訊し、淡水の誼久うして彌〻篤かりき」と。又曰はく「公の畫山水は元季の黃公望倪瓚を學び、尤も倪に心醉して其の勝趣を得たり、縑素に作る每に自ら韻語を題し、書法も亦智永趙吳興に出入して絕えて俗筆無し、人爭ふて傳購せり」と。筆墨の高調以て知るべきなり、惟り吳思亭は其の論畫絕句に異說を傳へて云はく項墨林の書は松雪翁の意を得たり、而れども其の題畫の辭句には忌避に觸るゝの恐あるものあり、故に當時其畫を乞ふ者は、先づ靑錢三百を以て小童に餽り、畫き畢れば直に印章を用ゐ、取出して、其の題識を免れしめき、人之を免題錢と謂へり」と。然れども今此の幅の題句を讀むに吳の言ふ所に合するを見ず、吳修の傳ふる所は一場の途說に過ぎざるが如し。

張鳳翼書七言律詩橫軸

高一尺二寸　闊一尺八寸五分　絹本

此の軸、行書、七言律詩二首。詩に曰はく

緩帶風流麟閣聞。鴛湖雷動星文。油幢揮扇淸金虎。畫燭傳籤艸練裙。
將略廿年龍塞月。詩城百丈鳳山雲。塵驅輝炤驚飛雪。蓮嶽凌光佩紫芬。」
寶校金纏福海天。靑携甘雨落羅韉。霆鞭霜肅千營柳。鰲極晴開萬井炮。
玉骨照城皆禮樂。劍花晴開編原田。郊陰士女昇平曲。譜入將軍文武絃。

「張鳳翼」と款を署せり、印記あれども模糊として辨じ難し。第一首の承句に一字を脫し、第二首の後聯に晴開の二字を誤用せるが如き、儒者不拘の狀を見るべきなり。

警庵は淸初の醇儒なり、先正事略の張鵬翼傳に云はく「明季學術の靡雜なりしに當りては、海內の宿老、孫夏峯、李中孚、黃梨州の如きすら尙濡染多かりき。先生は當湖の陸淸獻公と時を並べて程朱を宗主とし、地を異にして心を同ふせり」と。然れども警庵の貴むべきは惟學問のみにあらずして躬行に在り。嘗て四愚亭を冠豸山中の深邃なる處に搆へ、書を讀み琴を

鼓して自ら樂みき。逆帥耿淸忠の將軍劉應麟、琴を聽かんと欲し警庵を擄にして郡に至る、警庵白衣して琴を抱いて拜せず、應麟其の屈すべからざるを見て、竟に之を釋せりと云ふ。世人警庵を視て一介の學究と爲し、其の氣節の士たるを知らざるは、未だ眞に警庵を識るものにあらざるなり。

孫克弘寒山拾得立軸

陳繼儒題贊

高三尺四寸六分　闊一尺八寸八分　紙本

淡著色畫。寒山拾得を描す、面貌奇古、絕えて古來作家の畫ける所に類せず。蓋し寒山拾得を寫すに於いて、新に徑蹊を開けるものといふべし。「己酉夏日弟子孫克弘敬寫」と款識し孫允執、漢陽太守章の二印を鈐せり。

金箋詩塘に陳眉公の題贊あり、云はく、

文珠普賢、化爲寒山拾得、誦他一句兩句詩、便是五千四十八卷大功德　陳繼儒題

雪居は嘉靖十一年壬辰に生まれ、萬曆三十八年庚戌、齡七十九を以て歿せり、乃ち此圖を作れる己酉は萬曆三十七年にして齡七十八歲に當る、陳眉公は此の時五十二歲なりき。

此の軸は近年舶齎して日東に來り、巨價を以て一たび某名家に入れり。主人歿後、收藏の書畫を擧げて出售するに當り、耳食の徒、爭ひ求めて、劣惡の僞品と雖も亦餘す所無かりしが、惟此の軸は一人の之を顧みる者無く、賤價を以て吾齋に歸せり、雪居をして靈あらしめば、當に地下に大笑せむ。

孫克弘坐佛立軸

高二尺一寸六分　闊一尺二分　紙本

著色畫。結伽趺坐の朱衣佛を寫し、隷書にて「弟子孫克弘敬寫」と款し、傍に雪居士、漢陽太守の二印を鈐せり。

雪居は漢陽太守たりし時、東郭草堂に居り、槃礴觴詠、客至ること歸するが如く、其の佛像は夙に盛名あり、此の圖は衣褶を寫すに蘭葉描を用ゐ、鬚髮細きこと蛛網の如く、水墨紺青を以て渾染し、超塵、莊嚴全く作家の習氣を擺脫せり、道釋を畫きて俗惡に陷らざるは、尤も難しとする所、高手にして始めて之を能くすべし。

此の軸嘗て九琴十硯齋主人蒲作英華の鑑賞を經たり、作英の題籤、今なほ存せり、

孫克弘芸窓清供卷

畫　高九寸七分　長七尺六寸五分　絹本

題紙　高九寸七分　長四尺五分

著色畫。雙鉤を以て梅、菊、海棠、木蓮、牡丹、蓮花、芙蓉、各種の花を畫けり、用筆細緻、設色古厚、妍雅目を奪ふ。「雪居克弘」と款署し允執子、孫克弘、東部草堂の三印を鈐せり、引首に大隷書を以て「芸窓清供」の四字を自署し、「雪居孫克弘書」と款署して漢陽太守、雪居士の二印を鈐せり。

惲南田は花卉を以て自矜し、敢て輕しく人に許さず、而して平生服する所は惟沈石田、唐伯虎及び孫雪居の三家のみと云へり、雪居が花卉の畫品、以て推知すべきなり。

孫克弘十峯圖卷

董其昌、陳繼儒
朱之蕃題跋

高一尺六分　長七尺五寸　絹本

淡著色畫。十峯の風景を寫す、山容悠揚、雲煙縹渺、人をして仙境に入るの思あらしむ。「甲辰冬、爲十峯先生寫、孫克弘」と款識し、漢陽太守、孫允執、東部草堂の三印を鈐せり、甲辰は萬曆三十二年にして、此の時雪居は七十三歳なりき。

卷後別幅に董其昌、陳繼儒、朱之蕃の題あり、董其昌は楷行書、十行、「萬曆甲辰嘉平之吉、年弟其昌贊」とあり、

後紙に陳所藴、揚當時二家の十峰歌あり、皆殷氏十峯先生の爲に作れるものなり、陳所藴の書は陳道復に酷似し、勁拔奇肆、人をして避易せしむ。

殷十峯は其の傳を詳にせず、唯董其昌の題贊中に「惟余與君、生同甲、官同朝」の一節あるに依りて玄宰と同年、同僚たりしを知るべく、而して各家の文意に據りてその十峯に住し十峯と號せしを知る。乃ち雪居は十峯の圖を寫し、董、陳等當時知名の諸家は或は贊を作り、或は詩を題して贈れり、卽ち此の卷これなり。雪居の山水は既に甚だ獲難し、加ふるに玄宰、棗公等諸大家の題跋を以てす、此の卷をして彌〻重きを加へしむ。

王錫爵尺牘册

高八寸九分　闊四寸二分　紙本　計九頁

CL.
NO. 41178

萬曆の名相王文肅公の手札一通、凡て九頁、末に「十月吉日、錫爵頓首復、鳳兄老先生」と款識せり、縷縷數百言、時事を論じて剴切を極む、陸潤庠の跋あり、其の一節に云はく「萬曆二十一年、公再び朝に還る、當時元子を册立するの事を以て、擧朝侃侃として爭ひ、幾と變局を成さんとす、惟り公は宛轉調護せり、其の明年、遂に出閣講學の命あり、今疏中の語を讀むに、惓惓忠愛の忱、身不諱を冒すに至りても敢て諒を世に求めず、知るべし大臣國を謀るには必ず事の濟す有るを求め、悻悻口舌の辯論を以てするに在らざることを」と、文肅は其の子に清朝一代の畫伯王時敏あり、二世を通じて名聲、史上に赫灼たるは偉なりと云ふべし。怡親王寶及び周氏夢水山房等の藏印六あり。

澄懷堂書畫目錄卷三